家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第七十六巻　第六号　日本幼稚園協会

6

名古屋女子大学
52.5.24
図書館

子どもたちの健康管理のために——

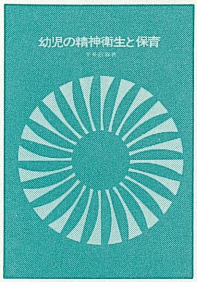
保育のなかの健康管理

育つ子どもたち

平井信義著

A５判 424頁 1,600円

子ども一人一人のからだの「個性」を大切にすること。からだだけではなく「心」の健康も大切にすること——この２つの新しい視点から書きおろされた著者最新の健康管理参考書。実際的な問題と、基礎的な子どもの健康の科学が、わかりやすく解説。



幼児の精神衛生と保育

平井信義著

A５判 224頁 900円

心の発達に必要な条件は何か。著者は子どもの側に立って母親や保育者に子どもの精神衛生の知識を説きます。

好評!!
フレーベル新書
★最新刊!

B６変型判

フレーベル新書 18

お話ギャラリー

滝来敏行著・平松尚樹画

144頁 550円

素敵な「お話先生」の憶い出を子どもたちに——ここには、お話のヒントをいっぱい盛り込みました。先生ご自身の語り口にあわせて、楽しく再生してください。

フレーベル新書 15

ひとくち童話

東　君平著

144頁 550円

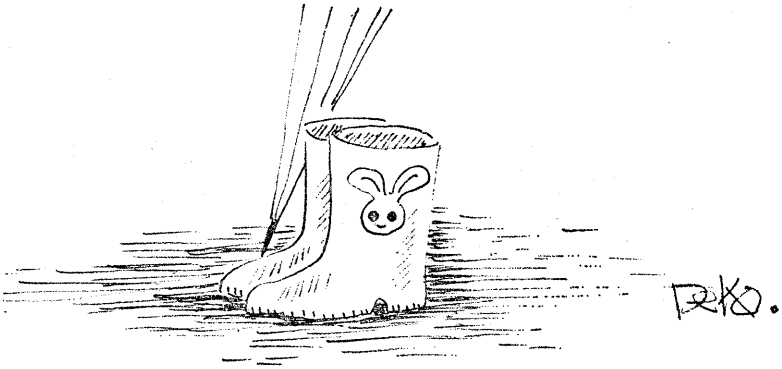
子どもにお話をねだられたら、すぐこの本を。子どもの世界を広く豊かにする、みじかいお話集。

☆くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課
(03) 292－7781(代) にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育

第七十六巻　第六号



幼児の教育　目次

——第七十六巻　六月号——

表紙　永瀬義郎（「こども」）

カット　中島英子

© 1977
日本幼稚園協会

幼児教育第二世紀にむかって……鈴木　とく…（4）
水戸藩と保母第一号豊田芙雄子……渡辺　宏…（8）
米国の幼児教育における五つの実験（九）……大戸美也子…（16）
ひとりひとりの子どもをみつめて③……赤羽美代子…（22）
若き保育者を育てるために……石割　陽子…（26）

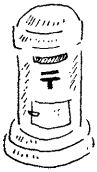
ハーメンと生き物たち……水藤　昭子…(30)
おばさんの子どものころ　11　光るステッキ……柴岡　治子…(40)

海外文献紹介……(42)
保育の体験と思索
——子どもの世界の探究——（七）……津守　真…(46)

★対談★　子どもの中からうたを……渡辺　茂
きき手・村田　修子…(53)

幼児教育第二世紀にむかって

鈴木とく



今、あらためて幼児教育第二世紀への志向を問われて、真面目に考えてみればみるほど、自分の過去の保育方法のあれこれが、砂上の楼閣のようにくずれてゆくような、たよりなさ、もろさを感じます。

幼稚園創立から半世紀すぎた頃、私は、託児所の保母になり、主に東京の下町スラム街の子どもたちとすごし、二十九年に保母養成にまわされてからも、ずっと乳幼児の保育を考えて来たつもりでした。

ここで自分の今考えていることをのべてみることは、現在の幼児教育が、ほんとうに盛んなのかという、悲観的になってしまう自分をもう一度、将来にむけて子どもの保育を考える姿勢にもどすことではないかと思い、お受けしたものの、難しさをどうすることもできません。勇気をおこして、二、三考えをのべて、皆様から御批判や御教示を頂いて、勉強しようと気をとりなおした次第です。

要点をあげてみると、次のようなことです。

- 自主性ある、考える保育者が育つこと。
- 子どもの自主性を育てる保育を。
- 第二世紀の児童福祉と教育の目的へのおもい。
- 自分が考え、して来た保育の実践の試みをねがう。（保育方法について）
- 乳幼児保育で最も大切にしていきたいこと。

以上のことについて、思いのままに書き進めることをお許し頂きます。

乳幼児の研究が進んで、諸学説が伝えられる度に、保母の気持ちは、これでいいのかしらと、不安におののきます。これは、日々、子どもたちの生活行動に目を奪われ、間近な保育だけを考えているからかもしれず、また、そのために、自分の保育方法を反省して、遠い将来に思いをはせる余裕がないからか

もしれません。それとも、保育に期待をかけすぎることから、はっきり自分の保育効果の現われを言い得ない状態に、悲しみを覚えるからかもしれません。

いろいろ考えてみて、結局は、自分が、自主的に、自分の考えを検討することなく過ぎることが多いからと言えましょう。

保育の世界に、つぎつぎと花咲く保育方法にさそわれて、飛びつき、あまりうまくいかないと、また次の新しさを感じる方法に移ってしまうという繰りかえしを見たり、形式化した保育をそのまま受け入れて安住したりなど、自分もまた例外ではなかったと思います。現在の保育界は、何かを追い求めて急ぎすぎている、と見るのは、不当でしょうか。これは保育界だけではない現象だとしても、乳幼児の生活を守る存在としてはどうかしらと考えてしまうことが度々です。

保育観、保育方法の論議が盛んになることは、これからの保育の発展の為には大切なことです。しかし現場が、それにつられて急ぎ足になるのを感じて、乳幼児保育に悲観的になることがあり、果たして、幼児集団保育は、人間のパーソナリティー形成の基盤になるのだろうかと、不審を抱いてしまうこともあります。また、昨今、「人間はどこまで動物ぃ」「どこまで物か」などいう仮説のもとの議論をするなどききますと、生物学その他の理論にうとい私は、言いようのない不安を、将来の保育に感じてしまいます。人間不信を育てるような、様々な研究が、この後次つぎ出されたら、私たち保育者は一体どうしたらいいのかしらなどと、余計なことかもしれませんが心配になります。

こうして考えますと、ゆれ動く保育者ではなく、自主性を持った保育者が、これからどんどん増して、きびしい自己研修を通してプロの精神を培ってほしいと願います。

また、そうした保育者と、家庭の人、特に両親とが相互理解と協力につとめ、乳幼児時代に、じっくり何を育てることが大切なのかを了解し合って、ゆったりと保育するようにしたいものです。

保育者たちと両親たちと共に、児童福祉法第一条が、地域のみんなにしみとおることに努力できたらと思います。

「すべて児童は、ひとしくその生活を保障され、愛護されなければならない」

今は、その「ひとしく」にむけて、幼稚園や保育所の先生たちは、どう思いをはせておられるのかしら、と考えてしまいます。

これとともに、教育を受けたい人は誰もがそのチャンスを得られるように、と考えますと、保育所も幼稚園もまだまだ不足しており、保育所からも幼稚園からも受け入れられない子どもが沢山いることが、この第二世紀に解消されたいと思いますし、あわせてマンモスから幼児の生活に適した集団になるよう、大人社会が真剣に考える方向へ進める必要を感じます。

保育者が自主性を持つことは、学者、実践家のユニークな保育方法論を自分の選択でうけとめ、考えるようになることです。

その人は、きっと、教育基本法前文や第一条教育の目的を、じっくりとかみしめくだき、自分の考えの中に入れて、幼児にあったその実践方法を考え、実施し、反省し、たしかなものにしていくにちがいありません。

特にその中で私が思うことは、個人の尊厳を重んじる、個人の価値をたっとぶということの日常保育態度が、保育者から自然ににじみ出るようにしたいことです。自主的精神に充ちた、勤労と責任を重んずる社会の形成者として育てたい意欲を、持ち続ける保育者であってほしいと思います。

長い間保育所の実践で、私が子どもたちの将来に描いたのは、基本法などまだ作成されない頃から思っていたのは、この基本法の先にのべた所でした。

意欲的に働く勤労者、考えて生産に従事する人、学歴や富に対して卑下することなく自分の考えを主張できる勤労者、そして集団に対して盲従することなく、他集団を拒否することなく、リーダーシップを発揮する勤労者として育ててみたいと思ったのです。以上を支えるものは、かわいがられたという思いではないかと思い、それはまた、他を思いやる情に転ずるのではないかしらと考えました。

これを保育方法でどのようにしたらよいかと、保育者集団で考え合い意見を出し合った結果が、年齢縦割保育でした。保育の組分けを、発達状況を同じくする暦年齢を基準とし、べつに、日常生活や時には遊びの生活で縦関係による種々な経験を通して、子ども同士まなびあうことを願って、地区別グループを組織したのでした。戦時中も、戦後も、三十年代にも、この考えの組わけをとり入れた保育をしたのですが、記録報告するように日誌を書かなかったことは、くやまれることです。

ひとつの組織の型にしてしまわなかったことは、大人も子どももオープンになることのよさを感じたと思われます。そこでは、過去の保育五項目や、いまの保育六領域を教えこむ保育は

主体とならず、子どもたちのグループへのかかわりあいや、自分で遊びの選択、集中、などをとおして生活行動が見守られたといえるかもしれません。

親も子も自己本位になりつつある現代の社会状況の中を思うと、こうした勤労者として育つ子どもの保育に、この方法を考えてみて頂きたいなと、希望的に、おそるおそる提言します。

知的教育は、勤労する人を育てることに、とても大切だと私は考えました。しかし、こちらからあれもこれもと知識をつめこむことに抵抗を感じ、子どもから求めることに苦心したいと思っていました。

倉橋惣三先生の『幼稚園真諦』の中の、「子どもがさながらで生き動いているところの生活をそのままにしておいて、教育の目的を、そこへもちかけていきたい」を読んで、こういう保育をしたいなあと思いました。今考えて見ますと、勤労者集団の中で生き、「ひとりは集団のために、集団はひとりのために」を真剣に考えていながら、一方で、個を大切に生かしたいと考えたのは、矛盾していはしないかと思います。しかし今もこのままです。第二世紀の幼児保育の実践家に、この融合がどこでなされるのか、保育実践して頂きたいとお願いしたくなります。

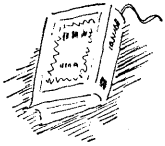
いろいろとこれからの保育に思うことを書きつらねて来ましたが、乳幼児保育では一体何がその子どもにのこるのだろうということについて、すっきりひとつと言われたら、何と答えようかと、この頃、とみに思います。私は、ほんとうに可愛がってもらったという満たされた感情を育てることではないかと、思います。というのは、大人になっていく大切な時期は、中学、高校時代の教育ではないかと、保育学生に接して思うことがしきりなので、ではそこへいく前の前の時代には？　と、自分に問いつめてみました。

してやりたいこと、させたいこと沢山ありますが、自主性が育つためには、自発的行動がゆるされる広がりと時間が必要です。行動がゆるされ（安全に見守られて）時間を待ってもらうことは、その子どもが本当に愛されていることなのだと思います。

管理社会、競争社会が、人間らしく管理されたりしたり、社会をよくするための競争が行なわれるようになるために、自主性と愛の感情を育てる保育の実践を工夫する世紀でありたいと思います。

（練馬高等保母学院）

水戸藩と保母第一号豊田芙雄子



渡辺宏

▶保母時代の芙雄女史

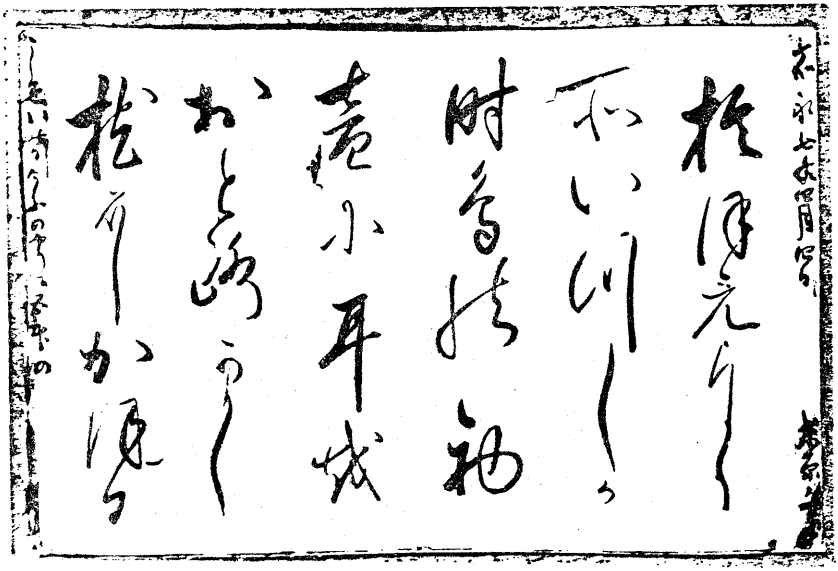
芙雄女史の生い立ちと家庭環境

東京女子師範附属幼稚園が誕生して満百年になった。その保母第一号豊田芙雄女史が生まれた弘化二年（一八四五年）は徳川幕府も外国船の渡来等により風雲急を告げたが、女史の出身地水戸藩にとっても、いわゆるご国難の非常時であった。藩主徳川斉昭（烈公）は、盛んに新政を施策し、国防教育等の改革事業を興したので、幕府の嫌疑を受け隠居謹慎を命ぜられ、父君桑原信毅も、女史が生まれてより百日ばかりたつと、幽囚の身となり、住居を召上げられて、小家屋当て換え蟄居せしめられ、家族はその蟄居屋敷に日陰者の生活を四年間も続けた。その間極く限られた親族以外の人との交際もできず、近所の子どもとも遊べない寂しい幼年時代の毎日だった。それでも母親雪

子の膝下にあって、温かい内にも厳しい家庭に育ったのであった。

父親桑原治兵衛は初めの名は幾太郎、諱は信毅、照顔堂と号し、天保二年に進士し彰考館（水戸光圀・義公が開いた大日本史の編纂所）に勤め、長沼流の兵学を善くし、国学にも通じ、常に筆を執り数多の筆写著作がある。祖父の治右衛門は、烈公の御息女雪姫の御附士として鷹司公家に上り京都におったので、父治兵衛も折々京都に赴き諸所の山陵を拝してはその荒廃をなげいていたが、後藩命により御附士として三年間京都に在勤し、この間山陵に関する取調べもし、大日本史の資料となったのである。殊に大和畝傍山の東南の神武天皇御陵の荒廃については、当時水戸彰考館総裁で後日女史の舅となった豊田天功と、しばしば書を往来して著作したのが「武山陵考」となって残っている。

母親雪子は水戸学中興の英傑藤田幽谷の次女である。幽谷の門下からは兄東湖を初め、会沢正志斎、舅豊田天功、桑原信毅等当時の天下の学者や志士の師表と仰がれた多くの人物が輩出した。後年、女史は「母は自分の口から言ってはおこがましいが、幽谷の子だけあり、女ながらも相当に学問がありました。幽谷は漢学も国学も善かったのでしたが、その剛直な漢学方面



▲ 芙雄女史八歳の習字

は男子東湖に伝え、柔和な国学の蘊蓄を女子雪子に伝えたらしいのです」と述懐している。維新の大指導者東湖も伯父に当たる。

女史の幼少の時は専らこの母雪子が詩歌を読み聞かせ家庭教育に当たり、五、六歳より師匠につき手習裁縫作法や薙刀の伝授を受けた。八歳半ばにして書いたのが、写真のように達筆だった。このように恵まれた家系に生まれたが、この母は十一歳父は十六歳の時他界してしまった。

女史の一生は実に波瀾万丈の人生であった。伯父東湖も丁度女史の生まれた弘化二年には、獄中にあって弘道館記述義の初稿をかきあげ、中国の文天祥が作った正気の歌に和して正気歌を作っている。この漢詩は、「天地正大の気粋然として神州に鍾る……」と日本の歴史を五言の長詩に詠じ、維新の志士を鼓舞激励し、偉大な感化を及ぼしたのだったが、女史は昭和十五年五月九十五歳の晩年において、次のように回顧している。

「なにしろ遠い昔のことですから、伯父東湖についても詳しくは覚えておりませんが、今でも眼に残っているのは、その頃、伯父が開いていた私塾『不息軒』と申しましたが、その塾へ袴をはいて肩をいからして入って行く姿でございます。伯父は二十五貫、身長は五尺五、六寸もあろうかと思われる大男で、色は黒く、頬は厚肉で、角ばった顔でした。眉尻が少し上って、左の眉のつけ根には、ほくろが一つございました。普通前こごみだったといわれていますが、なかなかそうではございません。リュウとした姿勢で眼光人を射ると申しますが、伯父の眼はよく光る恐ろしい眼でございました。私のおぼえている伯父はいつも総髪で、総髪は隠居か医者でない限り普通の人間はやらないものですが、伯父もこれを好んでやっていたとは思えません。それが子供心にも不思議でなりませんでした。何かわけがあったのでございましょう」

と、この当時は謹慎の身だったのであろうか、次いで、

「伯父はよく酒を飲み、始終、碁を打っていました。その相手に川崎六郎という宿屋の主人がよく出入りしておりました。またいつの頃でしたか、伯父と父がお酒を飲んでいる時私が障子の隙間から中をのぞいたら、即座に指を眼にあてて、あの光る目でアカンベをしたことをお覚えております。私が驚いて逃げると、伯父は大声で笑っておりました」

と、さらに安政の大地震について、

「あの地震は忘れもしない安政二年十月二日の朝四時頃でした。水戸でも大変な揺れ方で、私は母と共に寝床からまだ暗い庭へ飛び出しましたが、庭がまだ揺れていたのをおぼえていま

す。其の頃、父は江戸へ参っておりましたので、兄の力太郎が父の身の上を案じてすぐさま江戸へ立ちましたが、心配した父は別状なく、却って伯父の東湖が、小石川の水戸藩邸（注・現東京の後楽園）で梁の下敷きになって圧死したことを知り、兄は驚いて、その伯父の亡骸を長持に入れて水戸まで持って帰ったのでございました。その時伯父の母（幽谷夫人梅子）も一緒に藩邸にいたのですが、地震で一旦逃げ出したものの、部屋の火を消して来なくてはと、また引返そうとするのを『お母さん危ない、私が代りに行こう』と伯父が抱き止めたその時、梁が落ちて来たのだと聞いております。

私は子どもでしたから参りませんでしたが、母がお悔みに参りました。そしたら、伯父の死骸を拝んだ時、死んだ伯父の鼻から夥しい鼻血が出たということを聞いております。母だけでなく、近親の者、弟子たちなど、伯父と親しい者が見ると、きまって鼻血が出たそうです。皆が不思議だと申していました。不思議といえば伯母（東湖夫人里子）を見たある人相見が、『御用心なさい近くあなたの身辺に異変があります』といったそうでございます」等と生きた言葉で語る生きた伯父東湖の姿が眼に浮かぶ。特に、母を助けるために圧死した悲壮な最期は、日頃敬愛する伯父東湖の口先きだけでなく名実ともに身命をかけての孝の実践で、純情な童心にとって絶大強烈な教訓だったことであろう。小生も多感な学生時代小石川後楽園の道路端に立っている『藤田東湖先生護母致命之処』の記念碑を拝し碑文を読み感動し、それ以来東湖を崇拝し水戸学と郷土史を探究し続けることになった次第。

元来、水戸黄門光圀（義公）や中国明の遺臣朱舜水は孝を基本理念としたが、殊に女史の祖父藤田幽谷も非常に孝を重んじ、幼少の東湖を教育するにも特にこの孝に意を用い、孝道篤学の門人堀川潜蔵に孝経の素読を受けさせた。このことは、東湖の自叙詩史とも云うべき『回天詩史』や『東湖随筆』に自ら記している。三つ子の魂百までの諺通り、幼児の教育に力を入れたのだった。また女史が豊田小太郎に嫁いだ年に筆写した景山女誡では、胎教まで重視した文献があり、保育の鑑にしたいと思う。

水戸藩の蘭学と亡夫豊田小太郎の遺志

女史は、祖父藤田幽谷に学び、幼時より神童の聞え高く、精励勤勉で偉大な学儒だった彰考館総裁豊田天功の長男小太郎に、十七歳で嫁いだ。夫小太郎は俊英の誉があり、父天功と共に大日本史志類の編纂に従事。蘭学に達し『航海要録』も訳し

烈公に献じた。烈公は天功に次のような手紙をよせている。

「悴訳、航海要録よろしく出来、感心候悴もなかなか才子と存じ候」と。そして小太郎は二十一歳にして雷名高く、全国各地から入門する者があった。舅天功も五十歳になってから蘭学を初めたが、聡明さと努力で忽ちその蘊奥を極め、女史の父桑原信毅と共に藩主烈公に対し、藩校弘道館でも蘭学を正式に教える提議をしたが、烈公の反対でできなかった。水戸の儒者青山家出身で戦後初の婦人少年局長だった山川菊江氏は『覚書幕末の水戸藩』で次のようにのべているので、その烈公の手紙を引用させていただく。「桑原より追々申し聞け候蘭学の儀は、弘道館に於て教授致させたきよし申し聞け有之候えども、同所に於て横文字教授の儀は、我等申すまでも無之、会沢、青山とてもよろしくとは存じ申すまじく候。然るところ、豊田蘭学にはまり、当時同所長屋に居り候て、唯一（注・蘭学者栗原唯一）も隣に居り、便利の由にて、豊田事も同所に致したき様子に候えども、それは自分勝手というものにて、蘭学などの蟹行文字を右館中にて学ばせ候は以ての外に候えば、これは相成らざる由、我ら追々申し候ところ……」

こういうわけで、弘道館で洋学の研究は許されなかった。しかし烈公は、そのうめ合わせでもあるまいが、豊田の健康を案じて、貴重な牛乳を与え、運動をすすめて体力を維持するように注意を与えている。

「豊田儀、生牛乳好み候故、遣わしおき候所、このたび悴の話聞き候えば、酒はやはり多く用い候由の所、何ほど牛乳用い候ても歩行も致さず、机にのみ寄り居り候ては、必らず俗にいうよいよい病をひき出し申し候えば、宅に居り候て弘道館まで通い候よう申すべく候。遠くより歩行候えば、道に費え候ように候えども、一所に居り候てもよいよい病などひき出し候えば死候故、遠くより通い候よりは事は出来申すまじく候。豊田ぐらいの者もまたとは得難く候えば、歩行致さざるは甚だ宜しからざることに候。

この雲丹海胆到来故二箱遣わし申候。一つは会沢へ伝え申すべく候。酒の節口取には然るべく、会沢は養生家故、呑みすぎ申すまじき所、量太郎は安心致さず候。何分多く用いず、養生のみ用い候ようにと存じ候……　　青山量太郎へ」

弘道館の洋学のことから、教師の一人一人の健康にまで烈公は気を配っているが、これで洋学の件はお流れになってしまった。翌安政四年六月、武田耕雲斎が烈公に上申して、人才を選んで英語を学習させ、以て外交の用に立たせたいと提案した。烈公は戸田、藤田在世中から、その申し合わせになっているが、

人物を見て学ばせないと大害がある、と答えた。このときすでに通商は始まり、仮条約のことで京都と江戸の間がむつかしくなり、そこへ将軍世子の問題がからんで時局多端、翌年は大獄の渦中にまきこまれた水戸藩は、洋学どころのさわぎではなくなってしまった。

かくて夫小太郎は、当時の複雑な藩内情勢の下に尊皇開国を主張し、脱藩して京都の同志のもとに投じたが、攘夷を称える反対派のために慶応二年六月暗殺された。二人の結婚生活は形の上では五年を数えたが、新婚とは名のみで、夫は始終留守勝ちで淋しいかぎりであった。唯、「心を鬼にしておれよ」との一言を遺し、遂に帰らぬ客となってしまった。しかし妻である女史は、うすうす知ったが、親族は彼女のために秘かにかくして知らされず、かなり後日になってから正式に夫の死を知らされたのであった。よわい八十歳を過ぎてから、或る日「私の夫は本当に冷たい人でした」と家人に述懐したとのこと。最愛の妻にさえ企ての秘密をまもって私情を殺して一命を国事に捧げた大丈夫の心もさることながら、二十一歳にして未亡人となってしまった女史の心情はいかばかりだったことか。

そればかりか、元治甲子の天狗騒ぎ（筑波旗挙）や病気によって僅か一、二年のうちに肉親を七名もつぎつぎに失い、文字通り天涯孤独となってしまった。慶応三年九月、夫小太郎を追悼して謹書した七尺六寸の長文は読む者の襟を正さしめ、感動の涙をさそうものがある。しかし、この悲嘆のどん底より雄々しくも起ち上がったのは、夫が別れるときに遺した「心を鬼にせよ」との言葉だった。そして決然と自活の道をえらび、自己にふさわしい教育の道によって、夫の遺志である開国進取のために一生を捧げようと決意したのだった。冬子を芙雄（ふゆ）と改名したのも実にこの時である。

教育者として立つ

このうら若くして未亡人になった女史は、毎夜遠い漢学塾へ、提灯も持たず足音のせぬように草履をはき、懐剣をたばさみながら通い続けたのであった。自筆の履歴書には明治元年から昼間は自宅で附近の子女を教育したことが記されている。

いよいよ明治三年になり、世の中も漸く鎮まり新時代の黎明がほのぼのと明けそめたので、私塾を開業、二、三十名の子女が集まり和漢書の手ほどきをした。

同五年には学制が布かれ、水戸旧豊田家屋敷跡に県立の発桜女学校が開設され、教員の要請を受けて、ここに私塾の子女一同を連れて移ったのだった。因みに、「発桜」とは、丁度女史

が生まれた弘化二年に、東湖が中国の志士文天祥に和して正気歌を獄中で作ったことは前記した通りであるが、「発いては万朶の桜となり……」から名付けられたのである。全国最古の女学校だったようであるが、女史が同八年東京女子師範の読書教員として招かれ上京すると間もなく、この女学校も男子校に合併して消え、小学校になってしまった。発桜女学校をやめる辞職願を県へ出したところ、大きく赤字で辞職願は聞届け難い旨の返事があったが、まもなく文部省から県庁へ通達があり、こんどは逆に県庁が地元の副戸長を通して速やかに上京出頭するようにとの通知が女史に届けられた。当時の役所も、下からの願より上からの通達に弱かったようであるが、よくも当時の資料が保存されたと感心し苦笑させられる。

かくて、明治九年には附属の幼稚園が開設され、保母専務心得として日本での保母第一号が誕生したのであった。ここに、まだ幼児教育について一般社会が全く理解のない時代に『保育の栞』にもあるように、「人生将来の福祉安寧を得んとする基礎立つ可し」の信念に生きた彼女に満腔の敬意と感謝を捧げたい。

因みに、東京女子師範摂理（校長）中村正直氏（号敬宇）も女史の亡夫小太郎と同様に開国進取を称えたため、水戸攘夷派の仲間で当時の常陸府中（現茨城県石岡市）の花光院で塾を開いていた信州出身の儒者薄井龍之のため危うく暗殺されるところを、母親の犠牲的機転により助けられた。敬宇も自叙『千字文』で、佐久間象山の死を惜しみながら「踵いで吾れも譏りを蒙り、あやうく災厄にかからんとす」と当時を述懐しており、同じく開国論者で不運にして犠牲になった豊田小太郎の未亡人を保母第一号として抜擢したのであった。

明治九年十一月十八日付の東京日日新聞によると、雑報欄の『トウアイ氏幼稚園の概旨』（敬宇訳稿）には、第三項で「フレーベル氏の幼稚園の事を了解する婦女を得ること最も肝要なり、この婦人は考思する慣習を有つべし、快活の心あるべし、中心に発する内外合一の品行あるべし、小児を真正に愛する心あるべし、普通学を学ぶものなるべし、教育の理と教育の実事とを知り経練するものなるべし云々」と保母の人格が児童を感化すること大なるを重視している。このために、全国の女子教育家の中から女史を保母第一号として白羽の矢を立てたのである。

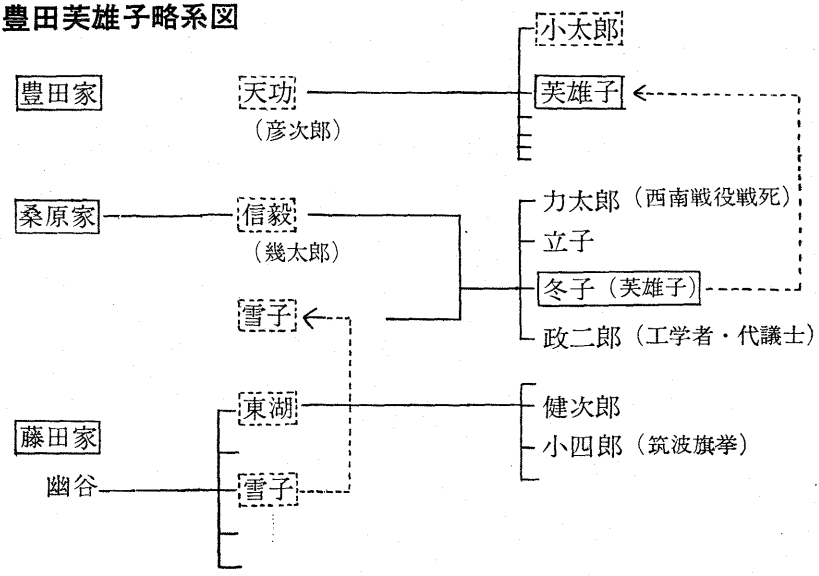
尚、茨城県では保母誕生百年記念出版として、『豊田芙雄子と保育資料』と女史自筆の『保育の栞』（複製版）を発行し保育まつりを開催し、豊田芙雄子展、記念墓碑を建立し、現在「保育の日」と「豊田芙雄子賞」の設定を準備推進中であることを附記させて頂き度い。

（茨城県石岡市・泉ヶ丘保育園）

豊田芙雄略年譜

西暦	年号	満年齢	重要事項
一八四五年	弘化　二年	零歳	水戸に生まる、幼名桑原冬子
一八五五年	安政　二年	九歳	江戸大地震、藤田東湖圧死
一八六二年	文久　二年	十七歳	豊田小太郎に嫁す
一八六四年	元治　元年	十九歳	筑波旗挙（天狗騒ぎ）
一八六六年	慶応　二年	二十一歳	夫小太郎京都で暗殺
一八七〇年	明治　三年	二十五歳	私塾を開き子女を教育
一八七三年	同　六年	二十八歳	茨城県立発桜女学校教員
一八七五年	同　八年	三十歳	東京女子師範読書教員
一八七六年	同　九年	三十一歳	同幼稚園保母第一号
一八七九年	同　十二年	三十四歳	鹿児島県幼稚園へ出張
一八八六年	同　十九年	四十一歳	共子女子職業学校開設に従事
一八八七年	同　二十年	四十二歳	文部省欧州女子教育事情調査
一八九一年	同　二十四年	四十六歳	帰国、府立第一高女講師
一八九二年	同　二十五年	四十七歳	豊田塾後翠芳学舎を開く
一八九五年	同　二十八年	五十歳	宇都宮高女教頭
一九〇一年	同　三十四年	五十六歳	茨城県高女（水戸二高）教頭
一九一三年	大正　十二年	七十八歳	愛国婦人会副会長
一九二五年	同　十四年	八十歳	大成女学校長（現茨城女子短大） いばらき新聞「芙雄号」
一九四一年	昭和　十六年	九十六歳	逝去（十二月一日）

豊田芙雄子略系図



米国の幼児教育における五つの実験（九）

大戸　美也子

福祉と保育とを統合する実験

はじめに

"Day Nursery" という言葉は、「保育所」と訳されていることは衆知のことである。ところが、一九六〇年代に入ってからこの言葉に代わって "Day Care" という「専門的用語としても、個人的用語としても、あまりなじみのなかった、ぎくしゃくした、また侮辱的な印象を与える言葉」(Caldwell, 1971) が頻繁に使われるようになってきた。その扱い方をみると、一般的用語として「保育所」と同じように使っている場合も、明らかに従来の保育概念を脱皮した新しい福祉・保育施設を示す固有名詞として使っている場合もあって、やや混乱している。ここでは、「デイ・ケア」を保育所の今日的表現とみなし、訳を付けずそのまま使うことにする。

米国のデイ・ケアは、一八五四年ニューヨーク市立小児病院の附属機関として設立されたのがそのはじまりで、すでに百二十年以上の歴史をもっている。この間にデイ・ケアの目的も、展開する場所も、主たる対象者も、また保育内容も大きく変化してきた。ことに、一九六〇年代の変化はめざましく、その名称までも一変させた程である。今日の総合的デイ・ケアの仮説、実践、その問題点を展望するためには、百二十年の間にデイ・ケアが一貫しておこなってきたこと、新しく変わったことをそれぞれ明らかにすることであろうと思われる。

一　デイ・ケアの変遷

デイ・ケア変貌の跡を明らかにするために、ここでは四つの項目に焦点をあてて、各時代の特色をみていくことにする。

1　デイ・ケアの目的――デイ・ケアがどのような機関として求められたかという観点からその目的を明らかにする。

①　特別の人々を対象とする福祉機関

②　それを必要とする人々の公的機関

③　政府、地方自治体による社会政策の手段

2　デイ・ケアを主として展開した場所

3　デイ・ケアを主として利用する人々

4　デイ・ケアの主な内容

以上の項目を要約したのが後載の表である。この表から、百二十年のデイ・ケアの歴史は三つの大きな変遷を経て今日に至っていることがわかる。即ち、

1　子ども・家庭の救済の時期

2　子どもの保護、世話の時期

3　子ども・家庭の保護、強化の時期

(1)　子ども・家庭の救済の時期

百二十年のデイ・ケア史の前半分は、死と餓えに直面している子どもの救済にその中心がおかれていた。一八四〇年代に入って、医療の発達と共に、市民の衛生、健康管理の知識も次第に普及し、幼児の死亡率も低下の傾向にあった。ところが、勤労婦人の幼児の死亡率は依然として高く、このことが社会問題化し、児童福祉の第一歩はこの乳幼児死亡率の低下をめざしてはじまったのである（Forest, 1927）。当時としては、その数も少なく、特別の入所基準もないまま、十五週の乳児から三歳までの子どもが一室に入れられ、経験のつんだ看護婦の手で管理された。

健康への関心は、規則正しい生活習慣、正しいマナーへの関心とただちに結びつき、良いお行儀に対してはチケットを与えるなどしており、今日の行動修正主義が採用しているトークン・エコノミー（本誌三月号参照）をすでにとり入れていたことが報告されている（全米保育所連盟、1940）。また年長の女児には裁縫等も教えていたので、初期の保育所は、ただ子どもを集めて管理していたのではないが、その雰囲気は陰うつなものであったという（Fein & Clark, Stewart, 1973）。健康管理としつけを重視したデイ・ケアは、その後しばらく続くが、一八八〇年代からヨーロッパ各地からの移民が急激に増加し、しかも彼らの多くが都市のスラム街の住人になっていったとき、彼らの生活およびその子どもの問題が新たな社会問題として、脚光をあびるようになってき

た。このような社会問題の解決のために反応したのがセツルメント運動である。セツルメント・ハウスは、スラムのど真中に建設され、あらゆる社会サービスの仲介所の役割を果たしていたが、その中心は、初期にあっては子どもの、後には親の「教育」にあった（Clemin, 1956）。一八九八年に、最初のセツルメント保育所がシカゴの有名なハル・ハウスに開設されるが、その開設動機は「そこに子どもがいるから」という単純なもの（Adams, 1910）で、その内容も子どもの安全管理が主であった。一九〇〇年代に入ると、保育所に幼稚園を付設して当時優勢であった、フレーベル主義の恩物による教育が実施されたが、フレーベル主義幼稚園がそうであったように、やがて形式的な教育になっていく。一方、同じ頃、西海岸では、公立学校に保育所を作り、子どもと家族の教育が始められていた。その設立動機は、移民の子弟の就学率をあげ、語学や生活上の知識の伝達をおこなって、アメリカへの適応をはかることにあった。彼らの多くは、幼い弟や妹の世話という仕事をもっていたため、就学率をあげる前提として、保育所は必須の条件であった訳である。またこの頃には、貧困の見方が変化し、その根は工業化社会にあるという見方より、親自身の意欲のあり方にあるとする見方が強まってきたため、貧困という社会現象を親の教育によって解決しようとする傾向もつよくな

デイ・ケアの変遷

	デイ・ケアの目的	デイ・ケアの場所	デイ・ケアの利用者	デイ・ケアの主な内容
1850年代	①勤労婦人の幼児の死亡率を低減すること	病院付設の施設 慈善事業団の施設	勤労婦人の子ども	保健指導・しつけ
1890年代	①貧しい移民の救済	セツルメント・ハウス	スラム街の子どもとその親	（子ども）食事の給与・休息・弱い者いじめからの保護 （親）法律・医療相談，住宅・職業のあっせん
1910年代	③移民家族のアメリカ化	公立学校	移民の子ども 移民家族（母親）	●生活の管理，健康管理 ●家事・育事の知識の教授
1920年代	①特定の勤労婦人（未亡人・	民間保育所	勤労婦人の子ども	●食事のマナー，保健，基本的社会性

	病気の夫をもつ）の対策	ナースリー・スクール		表現活動，自律活動，あそび
1930年代	①失業対策	連邦緊急保育学校	失業家庭の子ども	●食事の給与・休息・感情表現のコントロール，あそび
1940年代	①婦人の労働力確保	戦時保育所	勤労婦人の子ども	●生活の管理，健康管理，あそび
1950年代	①勤労婦人対策	民間保育所 親戚・知人による ベビー・シッター	勤労婦人の子ども	●身体的世話，非社会的行動と感情表現のコントロール，運動，あそび
1960年代	①勤労婦人対策	民間保育所から大学実験保育所まで	勤労婦人の子ども	●伝統的保育内容から教育重心の内容まで
	③貧困対策	母子センター	貧困家庭の母子	●親の教育参加，子どもの総合的発達，健康管理
1970年代	①勤労婦人対策	民間・公立の保育所	勤労婦人の子ども	総合的発達を促す内容
	②乳幼児の発達研究・教育法の開発	大学実験保育所	●さまざまの階層の子ども	
	女性解放運動	デイ・ケア・センター	●すべての子ども	
	企業の人員確保	企業内保育所	●女性勤務者の子ども	
	③貧困対策（共和党）	家族・デイ・ケア	●働く意欲をもった貧困家庭の母親	
	全体発達保障（民主党）	デイ・ケア・センター	●すべての子ども	
	都市対策	デイ・ケア・センター アフター・スクール	●スラム街の子どもとその母親	

り、デイ・ケアを中心に親の教育も盛んになっていった。

この時期のデイ・ケアは、身体的に、あるいは経済的に劣悪な条件にある人々の、最低の保障をめざす福祉施設を機能すると同時に、その後半には、社会改善のための手段としての役割を果たしたといえる。

(2) 子どもの保護・世話の時期

デイ・ケアが次第に普及してくると、これを簡単に使う親も増加し、親の養育の責任感の喪失を心配する者が増えてきた。また、これに呼応するように、一九二〇年代にナースリー・スクール運動と共に、幼児の研究がすすんでくると、幼児の発達における親の役割の重要性が明らかにされ、子どもを本当に救済するのは施設ではなく、親であるとする意見が優勢になってきた。そこで、この時期に、はじめてデイ・ケア入所基準が設置され、「未亡人と病気の夫をもつ婦人の子弟」のみがデイ・ケアの利用が許されるようになるのである。二〇年代のナースリー・スクールの興隆は、「母親よ家庭に帰れ」の思潮を作る一方で、ナースリー・スクールのデイ・ケアの役割を増大させ、両者は内容的に極めて接近したものになっていくのである。ナースリー・スクール運動のバック・ボーンは、デューイを中心とする進歩主義思想であったため、その内容は、子どもの自発活動、表現活動、身体活動を重視していた。従って、デイ・ケアもまたこれらを順守することとなり、前時代のデイ・ケアとは異なり、子どもの心理的な要求をとり入れた保育内容が、この時からスタートする訳である。福祉と保育が歩みよりをみせた矢先に、経済大恐慌が発生し、再び福祉優先のデイ・ケアに逆戻りしてしまうのである。「連邦緊急保育法案」は、一九四一年までつづくが、その法案と入れ変えに、今度は第二次大戦突入で「戦時保育所」がはじまり、一九三〇年、四〇年代のデイ・ケアは、親の代理として子どもの世話と保護をその中心的課題としていたといえる。

大戦後、男性が戦場から戻ってくると、彼等の職場復帰のために、勤労婦人は再び「母親よ家庭に帰れ」のキャンペーンにのって、家庭婦人に戻っていった。もちろん、勤労を続けなければならない、またそれを希望する女性は沢山いたが、家庭婦人の増大していく状況にあっては、勤労婦人の対策は必ずしも充実したとはいえない。勤労婦人は、その子どもを近隣の民間の保育所にあずけたり、親戚や近所の人にベビーシッターをたのんだり、あるいは子どもを家に残して仕事に出かけていったのである（Caldwell, 1971）。保育所に預けられた子どもたちは、すでに保育所の

主流になっていた、福祉と保育を統合した経験をもつことができたが、大多数の子どもは、安全だけが配慮される単なる管理下におかれていたのであった。

全体としてこの時期をながめると、内容改善にやや前進がみられるものの、デイ・ケアは、勤労婦人の対応策として、不完備ながら機能していたということができる。

(3) 子ども・家庭の保護、強化の時期

デイ・ケアの量、質両面にわたって一大飛躍するのがこの時期である。そして、今日では、「幼児教育の中で最も重視され、最も高価で、最も人々の話題になっているのがデイ・ケア」(Hymes, 1975) という状況である。その結果、あまりにも沢山の人が、各自のデイ・ケアの必要から、さまざまなセンターを発展させているため、デイ・ケアの正体をつかむのが困難なほどである。一体、どうしてこんなに急速に、デイ・ケアの思想が普及したのであろうか。その背景について簡単にみてみよう。

母子センターの発生

一九六六年、ヘッド・スタートの効果を充分にあげるために、ハント (Hunt, 1967) を会長とする特別委員会が、ヘッド・スタートを上と下とへ拡大する勧告をおこなったことはすでにみた(本誌二月号参照)。フォーロー・スルーは、ヘッド・スタートを「そのまま上へ」拡大したプロジェクトであったのに対して、母子センターは「そのまま下へ」おろしたプロジェクトである。一九六七年の秋、三十六の地区が選ばれて、母子センターのパイロット・プログラムがすべり出した。この計画は、引きつづき二年間継続することが保障され(七〇年の夏まで)、プログラムの開始と同時に、その成果を評価する研究も平行してすすめられた。

このプログラムの対象は、ヘッド・スタート同様、一定の所得水準以下の家庭の母親と三歳以下の乳幼児である。そして、その内容も、ヘッド・スタート同様、子どもとその両親に対して、健康、教育、社会的サービスを提供するもので、その運営に当たっては、母親が半数を占める計画委員会が主要な役割を果たした。また、この計画委員会には、コミュニティの教育、保健のサービス機関を活用する意図から、コミュニティの代表者が、またその内容の指導から、その地区の大学関係者も参加して情報が提供された。

(つづく)

ひとりひとりの子どもを見つめて ③

赤羽　美代子

一月も中旬の、ある日の出来事である。

この日の朝、H子の登園がやや遅れているので、私は、ちょいちょい、園の玄関にH子の姿を求めて見にいった。H子は去年の秋に弟が生まれてからは、母方の祖母が園まで送り迎えをしている。この二、三日は、途中で祖母と別れ、H子ひとりで登園してくるので、大分、緊張して園に着く。（通園方法は私鉄とバス利用、通園時間は約一時間）

やがて、緊張した顔つきのH子の姿が見えた。H子は私の姿を見つけると、ホッとして緊張した顔をくずし、笑って駆け寄ってきた。私もホッとし、両手を広げて、

「H子ちゃん、おはよう。待ってたのよ」

と、私の手でH子の頭を包み込んであげる。H子は息をはずませて

「おはようございます」

と私に挨拶をする。ふと、H子は私のカーディガンの中に自分の頭を入れて、

「アッハ、、、、」

と笑っている。H子の母親は紺色を好んで着ている。今日の私のカーディガンは、H子の母好みの紺色のカーディガンである事を思った。H子は、登園がやや遅れて、途中の道では友だちの姿にも会わず、緊張しながら、息せき切ってやって来たのだろう。今、そのゆるみを身体に感じ、同時に懐しい日なたの匂いを嗅いでいるように、この紺色のカーディガンに、母を感じているのではあるまいか。しばらくの間、

「先生、私を待ってたの？」

「私がいなくて淋しかったでしょう？」

と言いながら、上履に履き替えていた。私に促されて、スキップで部屋へ急いだ。

H子は、弟誕生の半年前より、私立小学校受験のため塾通いやら、母親の出産、またH子の世話をしてくれる祖母が病気するやらで、周囲の都合による欠席が目立っている。私は、今日はH子の甘えの対象になって、十分にH子を甘やかせてあげようと思った。

すでに九時半近くになっている。あちこちでは、グループを組んでの遊びが発展している。普段のH子は、身長、体重も年長組では一番大きく成長していて、クラスのリーダー格であり、はきはきとした利発な子である。冬でも暖かい日などは、頭に水を被ったかと思われる程汗をかいて、ダイナミックに遊び切る。そんな時の教師は、憐れにも遊びからはみ出されてしまう格好になる。

H子が、ブラーッと部屋から出てきた。動物が獲物を捜しているように、すでに始まっている遊びの中に、自分はどう溶け込もうかと、捜している目である。私はH子の外側にいて、H子がどうでるかを待つ事にした。

四、五分程すると、H子がべそをかきながら、私の所に来た。

「先生、私は乞食みたいに、お人形の蒲団が一枚しかないの。全部、K子ちゃんが持っていってしまったの」

と泣き声を出す。

「困ったわね—。K子ちゃんに入れてって聞いてみたの？」

「まだ、聞いてない」

「聞いてみたらどうかしら？」

「うん」

H子は幾分重たい足どりで、K子の所に行って交渉している。いつもは、ねばって、何とか遊びを自分の思うように引っぱっていってしまうH子だが、

「K子ちゃん、やっぱりだめって言ったの」

と帰ってきた。私は丸くてポチャポチャとしたH子の頬を両手でふわっと包んで、

「先生のカーディガンではいけませんか？」

と聞いてみた。私の両手の中で、H子の目が輝いた。明るい声で

「いいよ」

と元気な返事が返ってくる。私はH子に母の匂いのするカーディガンを着せて、一度、力を入れて抱いてあげると、H子は、ダブダブと駆けて行った。H子のおかしげな姿を見かけたK子や他の女児たちが、H子を見過ごすはずがない。H

子の所にとんできて
「それ誰の？　先生のでしょう？」
「どうして借りたの？」
と聞いている。やがて紺色のカーディガンがきっかけに、友だちも増えて、いつものH子のダイナミックな活気に満ちた遊びが展開していった。

やがて、時計も十一時過ぎて、片づけが始まった。
「先生、どうもありがとう」
とH子がきちんと畳んだカーディガンを返しにきた。
「いいえ、どういたしまして。いつでもどうぞ」
「あれー、先生の手、冷たいね」
と言って、H子の小さい両手は、私の大きな両手をくるんでくれた。
「先生、私の手、暖かいでしょう？」
と言って、次に、私の頬を自分の手で挟んで暖めてくれる。
「あー、暖かい。H子ちゃんの手から温泉が流れ出てきました」
「ウヘ、、。先生って、やだわ。やだわ」
と、他の女児たちと駆けていく。

翌朝、H子が登園してきた。私を見つけ駆け寄ってくる。
「先生、遅いのですが読んで下さい」
と、手紙を鞄の中から出して私に渡す。折り紙で、自分で作ったピンク色の封筒に、ハートの模様が書いてあり、その下に私の名前が書いてある。中から、星とお姫様の絵が描いてある手紙が出て来た。
「あけまして　おめでとうございます
　ことしも　よろしく　おねがい
　いたします　　H子」
と書いてあった。
私も、H子に、どうぞよろしくと、頭を下げる。
私は、先ず、H子の心に自分を乗せてからH子とかかわる事ができてよかったと思った。子どもの内面の世界で共存し、遊びを共有していくために、子どもを、もっと、もっと知りたいと願った。

（霊南坂幼稚園）

第７回　みどり会夏季研修会のお知らせ

今年も泊りこみで研修をいたします。幼児教育は知れば知る程深く探求しなければならなくなってまいります。みなさまとご一緒に又回を重ねて，保育の心を深めてまいりましょう。みなさまお誘いあわせてご来会ください。おまちしております。

○テーマ　「保育の内容を考えよう」

○期　日　昭和52年８月21日（日）22日（月）23日（火）二泊三日

○場　所　静岡県熱海市上宿町1—29　ＴＥＬ0557—81—3524（代）岡本ホテル

○費　用　参加費　5000円　　宿泊費（２泊６食）13000円　　計18000円

○定　員　300名

○申　込・下記の申込形式でお書き込みの上，全額費用をそえてお申込ください。
- 送金方法は現金書留，為替，振替口座（番号東京 99085）いずれでも結構です。
- 送金先　東京都文京区大塚２—１—１お茶の水女子大学附属幼稚園内みどり会研究部宛
- 尚定員に達しましたらお断りすることがございます。またご希望の分科会も人数の関係で第２希望にまわっていただく事がありますのでご了承ください。
- ６月15日の消印から受付けます。
- 申込後取消の方には参加費はご返金できませんのであらかじめご了承ください。

○内　容　(1)　講演　　講師交渉中

(2)　分科会

第１分科会　幼児期のモラルについて再び考える
講師　お茶の水女子大学教授前附属幼稚園長　勝部　真長先生

第２分科会　保育の実践と理論　　講師　お茶の水女子大学教授　津守　　真先生

第３分科会　幼児の知的活動を考える　講師　お茶の水女子大学教授
藤永　　保先生

第４分科会　幼児の世界と童話　講師　お茶の水女子大学助教授　本田　和子先生

第５分科会　幼児の指導計画を考える　　講師　神沢　良輔先生

第６分科会　幼児の生活とあそびについて考える
講師　埼玉県立教員養成所　立川多恵子先生

第７分科会　情操活動としての音楽リズム　講師　お茶の水女子大学附属幼稚園
堀合　文子先生

日　程

	7時	8時	9時	10時	11時	12時	1時	2時	3時	4時	5時	6時	7時	8時
8月21日(日)						受付	開会式	講演		オリエンテーション	分科会	自由 写真	食事 入浴	
22日(月)	起床	体操	食事	分科会		食事	分科会					自由	食事 入浴	懇親会
23日(火)	起床	体操	食事	分科会		食事	シンポジュウム	閉会式	解散					

参加申込書　下記の形式で１人１枚でお申込ください。

氏　名		男・女	希　望 分科会	第１希望 （　　分科会）	第２希望 （　　分科会）
勤　務 園　名	ＴＥＬ （　　）		勤務園 住　所	都 府 県	
夏　季 連絡先	ＴＥＬ （　　）				

若き保育者を育てるために

石割陽子

今年もまた若い保育者たちが巣立っていった。彼女たちは大学やその他の養成機関で、まず基礎理論を学び、次いで保育実習、教育実習を通して子どもと現場の保育者に出会い、それによって学生は、大きな自己変革と成長をとげ、そして巣立ってゆく。

保育者をおくり出す側としては、あれもこれもとつい盛り沢山のカリキュラムで学生を追いたてることになりがちであり、現場におくりだしたあと、どう育ったのかと気にしながらも、アフター・ケアはなかなか思うにまかせない。大学によっては、ゼミや研究会を開き、卒業生が集まって勉強する会を持ったり、また大学の講座を公開して、再び学校で現場の人たちが学べる方法など、アフター・ケアのための努力が夫々に試みられている。

ところで、学生たちは保育に関してどのような展望をもっているのであろうか。それを把握しておくことは、養成校としても、また保育の現場にとっても、決して無駄ではないだろう。

アンケートをもととした調査結果から、未来の保育者たちの保育への決意や、人生への考え方をみてみよう。

調査の対象は、仙台市にあるキリスト教主義の私立短期大学の保育科二年の学生、五十年度百三十三名、五十一年度百三十二名、計二百六十五名である。調査の時期は十二月で、従って各種の実習は全部経験している。

一　未来への展望

現場に入っていこうとする彼女たちは、まず仕事を何年位続けたいと考えているか。

表1　仕事を何年位続けたいか

希望年限	回答数	%
1～2年	3	1.1
3～4年	40	15.2
5～6年	11	4.2
6年以上	75	28.4
わからない	133	50.4
無　回　答	2	0.8
計	264	

表一のように、できるだけずっと長く続けたいが今はわからないというのが圧倒的に多く、ついで六年以上が二八・四%となっている。六〇%近くの学生は、六年以上、またはずっと続けたいと思っている。

ではこれらの学生は、どのようなことが最も大切であると思っているのか。表二の通りである。なお「その他」の内容としては、人間らしく生きる、人間関係、人と接して心のふれあいの中から学ぶ、女性としての優しさ、思いやり等があげられていた。

また、これからどのような生き方をしたいかと問うと、「一瞬一瞬を充実したものに」(六八・九%)、「楽しく」(一五・九%)、「仕事に殆どのエネルギーをそそぐ」(四・四%)、「良き伴侶にめぐりあえるように」(三・四%)、「社会に奉仕して」(一・〇%)、その他「宗教を求め神に従って生きたい」「自分らしくマイペースで」「いつも自分を見失わないよう」(五・七%)等と回答している。

さらに、これからの自分の精神生活に最も大きく影響を及ぼすと思われることは、「仕事の内容」(四二・三%)、「他の人々への愛」(三五・七)、「はっきりした思想——教育理念等」(八%)、「その他——自分の周囲の人々の指導、助言、自分の趣味、神に対する信仰と共産主義的思想」(八・七%)となっている。この辺に未来の保育者のプロフィールの一端がうかがえる。すなわち、若者らしい充実感を持って、仕事と人間にかかわることに、自分の生きがいを見出そうとしているのである。

表 2　最も価値を感じていること

	回答数	%
社会奉仕	50	18.2
書物を読んで論理を構成する	40	14.6
人生に美を見い出す	85	30.9
合理的に生きる（むだなことをしない）	16	5.8
人の上に立って多くの人々を指導する	2	0.7
その他	70	25.5
無回答	12	4.4

二　保育への決意

この若い保育者たちは、現場に出てからどのような保育をしたいと考えているのだろうか。「一斉保育（教師中心）と自由保育（幼児中心）を組み合わせて」が八〇・二%、「自由保育を主体に」が一〇・五%、「一斉保育を主体に」が四・一%、「特に考えていない」が八%、「その他」一・五%の順位であった。

どんなことに重点をおいて実践したいかについては、「創造性

を育てる」五三・六%が最も多く、「遊びを中心にして」三九・三%、「知的教育中心」と「その他」が各々二・四%で、「キリスト教主義的」は一・七%であった。

次に「もし、あなたのもっている保育理論が、従来の現場の理論と異なる新しいものであったらどうするか」に対しては、「最初は従来のやり方に耳をかたむけ、次に自分の保育理念や理想をうちだす」六五・七%が最も多く、「現場の先輩たちに相談する」二五・八%、「自分で正しいと思うことをやってみる」五・九%、「多少旧式であっても周囲のやり方にあわせる」一・五%であった。

以上まとめると創造性や遊びを大事にしてゆきたいという態度がみられ、一斉保育と自由保育の組合せを良しとしている。これは、現在多くの幼稚園や保育所でとられている考え方に一致するようである。

現場に出て保育をしていく上で、何か問題があったらどのように処理するかというと、表三に示すように、実践的な面でも理論的な面でも大きく現場に頼っていることがうかがえる。理論的な面では、短大の先生や、研究会、自分で解決等というのが多く、養成校側への期待も僅かに見られる。

今後どのような方法で保育の勉強を続けたいかというと「自分の職場を中心とした研究会などで」(五八・二%)が最も多く、「誰か(先輩、同僚、短大の先生に)相談して」(二二・七%)や「独力で」(一三・一%)やるが続いた。

以上のような結果から、保育への積極的な態度や、職場の先輩や研究会から学ぼうとする姿勢が大きいように見られる。

表3 卒業後の保育上の問題の処理方法

	実践的なこと		理論的なこと	
	回答	%	回答	%
同僚にきく	57	17.1	47	13.7
同じ職場の先輩にきく	247	74.0	159	46.2
短大の先生に相談する	0	0	31	9.0
研究会で問題解決する	5	1.5	35	10.2
自分で解決する	22	6.6	57	16.6
その他	2	0.6	4	1.2
無回答	1	0.3	11	3.2

三　障害児保育について

ここ数年来、東北でも障害児保育の問題が表面化し、市民運動に具体化されてきている。現在、我々の短大でも教育実習のガイダンスの中で、現場の先生においでいただき、お話をしていただ

いたり、仙台市内で有志によって行なわれている障害児のグループに、ボランティアとして学生が参加しお手伝いをしている。これから現場で新たに保育をしようとする学生が障害児の問題をどのようにうけとめているかというと、障害児保育が大きくとりあげられていることを、「望ましい」（四六・五％）、「いいことだ」（二七・九％）、「自分も積極的に協力したい」（二一・六％）、「あまり関心がない」（〇・七％）、「その他」（三％）という結果であった。「その他」の中には、関心はあるがどうしていいかまだわからないといった意見もあった。

次に自分のクラスに知的発達の遅れている子どもがいたらどうするかという問に対して、「積極的に指導したい」（七〇・五％）、「自分のクラスの子どもたちで手がまわらないと思う」（八・九％）、「その他」（一九・二％）が主なもので、その他の中には保育者一年生としては余裕がもてない、余裕が持てるようになったら努力したい等がかなり多く、積極的に入れたいというのではないが、もし自分のクラスに入ってきたら他の子どもと同じように暖かく指導したい、特別な接し方ではなく自然に接したい等という意見もあった。そして、そのような子どもたちがクラス内にいることは、「他の子どもたちに良い影響（いたわり、助けあい）を与えると思う」（五八・一％）、「保育者に人間存在の本質や価値観を与える」（二六・六％）が多く、「保育者にとって保育計画の実行と進展の妨げになると思う」（二・三％）は僅かにすぎなかった。

以上アンケート調査を中心に、保育の現場に巣立つ直前の保育者たちのプロフィールを描くと、まず職場の先輩を自分のモデルとし、やがては自分の判断でよりよい保育を考えていきたい。そして大いに研究会や自分自身でも学んでいこうとする決意を持っている。障害児保育については全面的に楽観しているわけではないが、積極的にその指導にあたりたいという姿勢がうかがえる。

このように、現場の先生方に期待するところが非常に大きいという現実が明らかであり、我々養成校側としては、現場の先生方との一層の交流をはかり、共に学べる場をつくっていかなければならないと思う。時には一つの大学のみならず、幾つかの大学の先生が協力しあって、夫々の大学の特殊性を生かしながら、夫々得意とする講座を公開し、現場の人たちと学びあえる場があっても良いのではないかと考える。

（尚絅女学院短期大学）

ハーメンと生き物たち

水藤昭子

教会堂のかたわらにある、古い小さな牧師館にすんでいたハーメン君のお話を書いてみよう。その古い牧師館は、小さな楽しい保育園につづいている。だからハーメン君の家の中は昼でも夜でも絶えまなく、子どもやおとなが出入りしている。その上、動物が幾種類も住んでいる。飼われているばかりでなく、あちらこちらから集まって来て、鳩は飛び交いチャボやトウテンコウは子どもらと共に散歩し、兎も庭をはねまわる。猫はじゃれ、卵からかえったばかりのあひるの子も育って、迷子の犬もそこにいついて、皆ハーメン君と子どもたちが大好き。

夏のひるさがり、千曲川に魚つりに行っていたハーメン君は、

「ハイ、オバサン、うなぎだよ」

と、背中に手をまわし、シャツの間からひっぱり出した長いものに、

「まあ」

と、一瞬、まわりにいた人たちは、吸いよせられるように見入ったが、次の瞬間、悲鳴をあげて逃げ去った。

「蛇じゃあないの、ああ、ハーメン君、お願い、その蛇、ここいらではなさないでね」

遠まきにして、彼の手にぶらさげられている蛇を、保母も子どもたちも、物珍らしげに、キャアキャア騒いで眺めている。

彼はヘビを水道の水で、魚でもあらうようにジャブジャブとあらうと、自分の手拭いでシュルリシュルリと拭いてやり、胸の中にしまいこんで、梅酒を戸棚から出して来て、蛇に飲ませはじめた。

蛇の口を左手で開き、右手にスプーンを持って梅酒を流しこんでゆく。

畳の部屋の大きなテーブルの上にヘビは観念したようにとぐろをまいてすわり、彼にされるままに梅酒を飲んでいる。梅酒をのませおわると、彼はとぐろをまかせて、左手の上にのせ、新聞を読みはじめた。蛇は逃げようともせず、彼の手の上に休む。そして時々かまくびをあげて、細くてふたまたにわかれた舌で、彼の頬をなめる。

「オイ、くすぐったいぞ」

彼は、全く友だちに言うように蛇に話しかける。蛇はまるでハーメン君の心がわかるかのように、かまくびをくねらせて、シュルシュルと頬をなめる。新聞を読みおわると、

「ねむろうぜ」

と、蛇を箱にしまいこみ、その箱を冷蔵庫に入れてしまう。

「冬眠だ」

と彼は言う。

「さわってみてよ。蛇はとってもすべらかな体をしているんだ」

と彼はいう。二、三日彼はこうして蛇と遊んだ。園児たちは蛇を新聞紙でつくりはじめた。そしてこの不思議な高校生のお兄さんをまねた。

「さて、家に帰るか？」

と、彼は蛇に言った。梅酒をたっぷりのませて、彼は名残りおしそうに蛇を背中に入れた。そして、自転車にのって、千曲川へゆき、つかまえた所まで行って、蛇をはなしてやったという。

「あの蛇、すぐ行ってしまわないんだよ。ホラゆけえ、ホラゆけえと、草むらに僕が追いこんだのさ」

その日からどのくらいたったであろうか。秋の日の或る夕暮れ、

「蛇だあ」

と騒ぐ声にとび出して行った彼は、子どもたちから蛇が縁の下にもぐって行ったことを聞き、彼も早速縁の下にもぐりこんで行った。

「みつからなかった」

と、はいだして来ると、今度は家の中の畳をあげ、床板をはぎ、床下へもぐりこんで行った。その素早さ、その一念、しかし蛇はみつからなかった。

またしばらくして、奥の方に住んでいる宣教師が、

「ハーメンさん、蛇です。地下室に入って行きましたよ」

と、呼びに来た。地下室は納骨室だがその一かくを除いて、あとは地下物置になっているので、彼は、その物置にもぐりこんで蛇を呼んだ。蛇はみつからなかったが、まわりの人たちの考えでは、それはきっと、あの時の蛇じゃあないかという。蛇をはなした千曲川からハーメン君の家までは、四キロメートル以上はあるし、ハーメン君の家は自動車の激しくゆきかう、町の真中にあるのだから、普通に考えれば、蛇のそんな話は想像もできない。

彼は十歳の時、深い山奥へ、教会の友だちとキャンプに行ったことがある。その時、

「ハーメン、蛇だ」

と騒ぎがおこった。彼は蛇の側へ走りよって、蛇をつかまえて、水筒の中へ、尾の方から入れた。蛇は、暑い最中だったから、水に体をつけてもらって、快よさそうに頭だけを出してハーメンの腰にぶらさがって、いっしょに山を登って行った。ところが蛇のきらいなリーダーから、蛇をにがすように命令され、彼は、蛇を頭の上にすわらせて帽子をかぶってかくし、とうとうキャンプ場まで、無事蛇をつれて行くことに成功した。彼はもう蛇に夢中で、団体の中の一人としてその行動をわすれ、蛇といっしょにまどろんでいた。すると、その時大変なことがおきてしまった。蛇のにおいが彼の頭にのこっていたためであろうか。蜂におそわれてしまったのだ。彼はたちまちふくれあがり、山を下り、注射をうけて、一夜その毒と戦うために苦しんだことがある。

ハーメン君、彼は、危機の連続で育ってゆく人間であった。種がからをやぶって成長する時のように、破壊と危機の連続であった。

「ただいま、かあちゃん」

病気でねている母親の枕辺にすわった彼は、ポケットとい

うポケットから、「こうもり」を出して見せた。どれもこれもちがった顔をしていて、彼の手の中でおとなしく、母親をみているのだ。

「洞穴にいたんだよ。太郎山の洞穴に僕が入ってゆくとね、バタバタと何かが僕の側をすりぬけてゆく。そこで僕は脇の下ではさんでつかまえてしまったのさ、さて、これを地下室に飼うことにするか。それから、保育園の天井にもぶらさげておこう」

彼は、小学生の頃から山にゆかない日はなかった。山といっても、彼の子どもの足で、ふもとまで四十分はかかるだろうか。毎日のように母親をハラハラさせ、ある時は日暮れても帰って来ないので、彼の成長の期間、母親は毎日、山をみてくらしていたようなものである。

学校の先生からは、この危機と冒険の連続におびやかされて、時々手紙がとどけられた。

きょう彼は、こおろぎをしらべる時間に、こおろぎが逃げ出すからといって、こおろぎを口に入れ、ほおばって、勉強をした」

「きょう教室からいなくなった。どこへいったか心配していたら、彼の足もとに大きなひきがえるがあそびに来たので、彼はそれを抱いて教室を抜け出し、庭のすみで、かえると遊んでいた」

そうしてだんだん幼い日にさかのぼってゆくと、彼〝ハーメン〟は、トンマで危険な、涙と笑いの人であった。

しかし彼はまた、平和と愛と祈りの人でもあった。

カナリヤを十羽ほど飼っていたことがあった。子どもたちは毎日水を替え、餌をやり、カゴをあらい、小さい力でいっしょうけんめいにつくしていたが、ある朝、ハーメンの不注意で、カナリヤが籠から逃げ出した。忠実な犬は、走って来て、それをとりおさえ、口にくわえて持って来た。

「ありがとう」

と、ハーメンは、犬の口からカナリヤを受けとったが、すでにカナリヤは死んでいた。ハーメンは、涙をポロリとこぼしたと思うと、突然耐えきれぬように泣き出し、家に入り、いつも彼の祈る場所に坐り、祈禱書を手に祈りはじめた。

「あわれみ深き父よ。我らは思いとことばとおこないをもって、多くの罪を犯し、幾度となく主にそむきしことを、悲しみてさんげし奉る。願わくは、我らをあわれみ、我らの罪をことごとく許し……」

泣きじゃくり泣きじゃくり、彼のささげているのは〝懺悔の祈り〟（聖公会祈禱文）であった。母親はその姿に感動し、七歳の彼と共に祈った。弟や妹たちもぞろぞろとついて来て、共に祈るためにひざまづいた。

教会の庭にはよく猫の子が捨てられる。彼らはそれを拾って来て育てようとこころみる。試みるが、なかなか育たない。死ぬ。そして泣く。彼らはかわいい仔猫たちを抱いて、母親が彼らにするようにお祈りもする。ある時、ようやく育ちそうだった仔猫が、こたつの中で一酸化炭素で中毒死という事件がおきてしまった。

ちょうどその時、ハーメンの弟や妹たちも勉強をし、絵を書いているという、とても静かな時だった。となりの部屋で父親がふとんを敷こうと掃除をしていた。そしてその時、死んだ仔猫がこたつの中から発見された。

母親が驚いて近より、仔猫を抱き上げた。六歳のナコは「ワーッ」と母親の肩にかぶさって来て泣き、九歳のハーメンは、鉛筆を持ったまま、その場に立ちすくんで泣きはじめた。八歳のタークンは、悲しみに打ちかとうと、唇をとじ、四歳のオーブは、自分はどうしたらよかろうかと、しょんぼりとして、この兄や姉の悲しみに包まれていた。

母親は背にかぶさって泣いているナコをそのままおぶって立ちあがり、台所へゆき、エプロンで涙をふきふき、空箱の中から一番きれいな桐の箱を持って来て仔猫をていねいに箱の中に入れた。ナコは泣きじゃくりながら、

「マリはかわいそうよ。箱に入れてはかわいそうよ」

と言って、何度も頬ずりをし、腕の中にかかえては、ただ泣きつづけている。

「かあちゃん」

と、二番目の男の子が母親の側に来た。

「ハーメンチャンもナコも泣いちゃった。でも僕は泣かないよ。かあちゃんも泣かないでしょう」

子どもの前では泣くまいと、何事がおきてもいっしょうけんめい、涙を見せないですごして来た母親は、涙でうるんでいるこのタークンの顔をみつめた。そして静かにくびをふって、エプロンで涙をふいた。

さんざん泣いて、それから子どもたちは誰いうとなく、仔猫のためにいろいろなものを創りはじめた。ナコは紙に仔猫マリの絵を書き、ハーメンはベニヤ板に、一メートル程の十字架をきりこみ、彫刻刀で「昭和三十三年二月二日　マリの

墓」と刻んでゆく。タークンはボール紙で塔をつくり、オーブは絵をかいている。部屋は紙きれと、クレヨンと、板ぎれとで、足のふみ場もない程にちらかる。父親と母親は、全身全霊をもって、この悲しみを見守るために静かに子どもたちの中にすわっている。すすり泣きの、その静けさの中から、突然四歳のオーブが尋ねた。

「どうして、こたつの中にいると、死ぬの」

八歳の男の子がまじめな顔で静かに答える。

「あのなあ、炭火の中に悪いガスがあるんだぞ。だから忍も、こたつでねる時は、もぐらないようにするんだぞ」

「まるで、僕らに、気をつけろって……」

と言いかけて、ハーメンはまた泣く。

「マリを埋めてしまうなんていやだわ。淋しがるわ」

と、ナコは母親に、どうしたら埋めなくてよいかと真剣にたずねる。死ということを悲しんで、多くの人がそのことを考えたんだけれど、死は「チリに帰る」(創世記)ことだと、母親は教える。どんなに淋しくても、そうして別れなければならないことを。すると、ハーメンは、

「マリの墓の上を、保育園の子どもたちが踏んで歩くかも知れない」

と、すすり泣く。

「ハーメンのつくった十字架をたてておけば、大丈夫。マリの墓だもの、誰も踏んだりしないでしょう」

二人は猫の死骸をかわるがわる抱きよせ、ほおずりしては泣き、

「もうちょっと気をつけてやればよかった」

といっては、心づかいのたりなかったことをくやんでいる。

そして、ナコは、マリの箱の上に十字架や花や小鳥の絵をかいては重ねてゆき、

「これはマリだけに見せるものなの。だけど、ママだけには特別にみせてあげる」

と、その紙きれを、そっと持って来て、母親に見せる。

「タマがどんなにおどろくだろう。そして哀しむだろう。だから、タマにはみせないで」

ハーメンは、そういって、タマという大きい猫のことまで考える。その日はちょうど日曜日だったので、七時から母親といっしょに礼拝堂へ晩禱に行った。いつものけんかはどこへやら、子どもたちはいっしょうけんめい、マリのためにお祈りをする。涙ふきふきお祈りをする。

「まるで、マリのためにお葬式ね」
母親が、そっと子どもにささやいた。

ある日ハーメンが例によって仔犬を拾って帰って来た。黒い仔犬で、まだ眼もあいていない。ずぶぬれのその犬に、彼はミルクを飲ませていたが、飲まぬといって泣き出した。人にかくれて泣いていた。お便所の中にかくれて泣いていた。
「かあちゃんがいけないんだ、かあちゃんがいけないんだ」
母親はずぶぬれの仔犬を抱きあげ、かわいた布でくるくる水気を拭きとって、こたつに入れて暖めた。
「ニャーン、ニャーン、ニャーン」
と、仔犬は仔猫のように泣いている。ナコは庭からあがって来ると、
「かわいそう、かわいそう」
と、頬をすりよせ、セーターにくるんで、そっと大事に抱いている。母親はミルクを少しあたためてお茶椀に入れると、
「タアクン、スポイト持って来て」
タアクンは持って来たスポイトで、仔犬の口に暖かいミルクを流しこんでやる。
「オーブは、ミルクのコップを持て」
タークンの命令で、オーブはミルクのコップを持って来て、兄の前にすわる。
母親は、便所にハーメンを呼びにゆく。
「仔犬は少し元気が出たようよ。ハーメンもう泣くのをやめなければ。ね、すぐ出ていらっしゃい」
しばらくして、ハーメンは母親の側へ来た。口をとんがらせてやって来たのに、三人でいっしょうけんめいミルクをやって、それを仔犬がのんでいるのを見ると、ホッとして笑いたいのを押えて、少し口をゆがめた。
「ね、やっと。よかったわ。でも、さっきかあちゃんがわるいって、とてもおこっていたけれど、あれはどうして？ママは何か悪いことしたのかしら？」
母親がそう尋ねると、ハーメンは
「この間かあちゃんは……」
と、話し出した。母親は、それは自分ではなくて、どこかのお話の中に出て来る魔法使いのおばあさんの話ならよい、と思った。
「そうだったの。ごめんね。ハーメン。ママが悪かった。許して」

母親は、穴があったら入りたいと思った。
それは、こういう話だった。この頃は、あまりに多い捨て猫や捨て犬のために、子どもたちの悲しみが大きいので、
「生まれてすぐなら、水につければ死ぬのにねえ。ただ捨てるなんて、こんなかわいそうなことないわ」
と、おろかなことを口にした。ハーメンは、それを早速実行してみたという。ところがすぐ死ぬどころか、水に入れるとおどろいてあばれたという。びっくりして水から出すと、セーターにくるんで、とんでうちへ帰って来たのだという。
「ほんとうに」
と、母親は、心から子どもたちにあやまった。
「ごめんなさい。そして、その仔犬をひろいあげて来たハーメンは、やさしい正しいよい子どもです」
それから、子どもたちは、あちらこちらに電話をかけて、いつものように仔犬のかい主になってくれそうな人を探した。
「僕、もらうよ」
話を聞いて、一人の男の子がやって来た。ところが子どもたちの協議は〝おことわり〟だった。
「あのうちのおばさんには、仔犬を育てることなんかできないよ。きっと、すぐに捨ててしまうよ」
近所のお寺の女の子が、仔犬をもらいにやって来た。
「あそこのうちならいいかも知れないね。みんなで行っておばさんに聞いてみよう」
行ったとたんにことわられ、お寺の女の子は大声で泣きはじめた。子どもたちが途方にくれて帰って来ると、
「もう、冷たい風がふいて来たから、おうち探しはやめて、今夜はここにとめましょう」
と、母親は子どもたちに言った。
「ウワーイ。ばんざい、ママありがとう」
ナコは母親の胸にとびつき、男の子たちは背中にとびつき、よじのぼった。さっきまで笑わなかったタアクンが、はじめて笑った。そして、わざわざ耳もとに口をよせて、
「かあちゃん、ありがとう」
と、ささやいた。
夜が来た。籠におふとんを敷いて、タアクンは自分の枕元に仔犬をねかせ、ハーメン君は根気よく、あちらこちらに電話をかける。やがて、子どもたちが安らかにねむった。母親は、子どもらの枕辺にすわり、おろかな言動をさんげし、子どもたちへの正しい導きを、神に祈った。

夜中になく仔犬に、母親は困惑し、脱脂綿にひたした牛乳を、根気よく吸わせ、仔犬を抱いて一夜をすごした。

さいわい、仔犬は二日程して、近所のチビという犬に乳をのませてもらうことになった。チビにも仔犬がいっぱいいるのに、よくそんなことができるものだと、子どもたちは感心していた。しかし三日目に家に帰されることになると、ハーメンは乳首を買って来て、乳を飲ませた。保温にも注意して、五日ばかり仔犬はようやく育って行ったが、子どもたちが公園へ遊びにつれて行った次の日に、下痢をして、仔犬は一晩中泣き、血便をして死んだ。

翌朝、母親は子どもたちに言った。

「クロは病気よ。さわってはいけません」

子どもらは、クロは眠っていると思って、静かに足音しのばせて学校へ出かけて行った。

思案のあげく、病気が子どもたちにうつるのを恐れて、子どもたちのいない間に、父親は、仔猫の墓のとなりに穴を掘って、クロを埋めた。そして、その上に墓標をおき、花を飾った。

保育園に行っていたオーブは、一番早くクロの死を知った。

「ハーメンたちには、何と話そう」

そう思って思案している時、遊びに来た大学生に話しかけているオーブの声がした。

「佐藤さん、クロが死んだよ。そして、ほら、あそこにパパが埋めた」

「えっ、そうかあ。かわいそうだったなあ」

そういって彼は、南の窓辺に腰かけた。そこへ子どもたちが帰って来た。母親は勇気を出して言った。

「タアクン、クロ死んだわ」

彼は「フン」と言って、どこかへ行ってしまった。

「ナコチャン、クロ死んだわ」

ナコは、眼をきっと見開いて、問い返した。

「ほんとう?」

ナコは、こたつに坐りこんでうつぶした。陽気な歌声が聞こえて来た。

「あっ、ハーメンだ」

母親は緊張してだまった。ハーメンは仔犬が今朝はよくねむっていたので安心しているらしく、何も問わず、おやつを食べはじめた。そして大学生にいろいろ話しかけている時、書斎からおりて来た父親が、いっしょうけんめいたてつづけ

に話しはじめた。

「ハーメン、クロは死んだよ。下痢がひどくなってね。ビタミンもおなかのくすりものませたけれど、血便もして。あれはもともと小さすぎたんだ。母犬の側からはなれるのが早すぎたんだ。助からなかったんだ」

「エッ？　クロが死んだの？」

ハーメンは立ちあがって、父親の前にたたずんだ。

「ウン。かわいそうだったね」

ハーメンの顔は、たちまちゆがみ、母親の側をだまってとおり抜け、戸を押しあけ、便所に入ってバタンと戸をしめた。台所の網戸が、そのあともギイギイと鳴って、妙にものがなしい静寂が残った。

「ハーメンは泣いているんだね」

父親は母親にそうささやくと、母親は、めんどうくさそうに、「ええ」と、答えた。それは、母親もまた、声を出せば、大声で泣いてしまう心配があったからだ。

夕暮れ、オーブは、兄や姉たちを墓へ案内していった。

「誰が、この墓つくったんか？」

オーブが言った。

「パパだよ。病気がみんなにうつらないようにって、パパがうめたの」

子どもたちは、墓の前にしゃがんで日の暮れるまで、生きている仔犬にするように、砂をかけ、山をつくり、花を飾り、石をならべ、語りあっていた。

いま私が、保育園の子どもたちに話しているとき、〝ハーメン〟と言うと子どもたちの眼はかがやく。このトンマで危険でやさしいユーモアのあふれるお話の主人公が、子どもたちは大好きなのだ。彼らにとってハーメンは、彼ら自身の心だからだと思う。

ハーメンは、今、ある牧場の獣医として働いているが、今のところ彼の恋人は牛だけで、それもあいかわらずのトンマ。危機と、冒険の連続で、牧場長を怒らせたり、笑わせたり、牛にはけられたりなめられたりして、生活している。数限りないハーメンのエピソードは、彼の中からわきあがる魂の歌そのものだと、私は思っている。

（上田・聖ミカエル保育園）

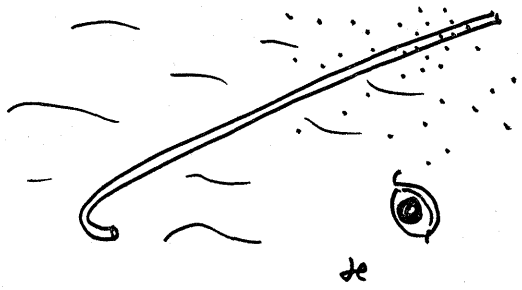
光るステッキ

文と絵　柴岡治子

お父さんが、ステッキをシュッと海の水の中にふると、ステッキに銀のポツポツがいっぱいついて光ります。

くらーい海の上、そしてお母さん、弟、おばさんは、戸畑から若松への連絡船のデッキにいました。連絡船といっても、ボートよりはずっと大きいけれど、腰かけなんか少ししかなくて、ほとんどの人が立っていました。またデッキといっても、海の表面より少し高いくらいでしたから、デッキの上からステッキを海の中にふることができたのです。

銀色に光るポツポツは、夜光虫だとお父さんは教えてくださいましたけれど、それが虫だと言うことはとっても不思議



で、暗い海の広がりの中で、ステッキが銀色に光るかざりをつけて走っているようで、とてもおばさんは楽しかったのです。ステッキについて光るだけでなく、波の音をぬって連絡船が進むくらーい海の上にも、小さな光るポツポツがいっぱいゆれ動き、ただよっていました。

多分日曜日に家中で、門司かどこかに遊びに行った帰りだったのでしょう。

船の上には子どもも大勢のっていましたが、何となく静かで、船が海の水をかき分ける音と、夜光虫の光だけの世界に、おばさんはいるような気がしました。

そのうち、若松の桟橋が遠く明るくみえ、みんな目をさましたように、空気も人も動きはじめ、ゆらゆらゆれて少しこわい桟橋に下りて、家に帰りました。

何に乗って帰ったのかな、多分電車だったような気がします。

★海外文献紹介★

Curious Mind『好奇心』——続き——

"Why Nature" by Gwen Zeichner, *Child Education*, Feb. 1975

"Learning What Children Know" by Margaret Yonemura, *Child Education*, Nov./Dec. 1974

"Growing Through Sensitive Listening and Questioning" by Robert B. Sund, *Child Education*, Nov./Dec. 1974

先月号に引き続き、好奇心についての小論を読み進めてまいりましょう。今回は、さらに具体的な例をとりあげて、好奇心を育てる方向を考えてみることにしました。

もし、まつかさを水の中に入れたらどうなるでしょう。

一九七五年二月号には"Why Nature"と題して、グエン・ザイヒナー(Gwen Zeichner)という人が、子どもの観察力や知覚を鋭くし、理解を深め、創造性を活発にするために、いかに自然物や生物が大きな役割を果たしてくれるかについて書いています。

そこで、早速筆者も家のガラクタ箱の中にあった古い乾いたまつかさを、水の入ったガラスのコップの中に入れてみました。するとどうでしょう。本文に書かれているように、四十分後にまつかさは、ほとんど完全に閉じてしまいました。(本文には三十分以内にと書かれている。)このことは、筆者にとってもひとつの驚きでした。湿ったまつかさを乾いた熱風にあてたら、再びみごとに開きました。著者は、このような驚きは確かに子どもの興味を引きおこすのに有効であるといいます。

「・まつかさの種はどこにあるのでしょう。・いくつか種類のちがうまつかさをふってみて種の大きさや形をくらべてみましょう。・種はどうして散るのでしょう。・まつかさの大きさとその

木の大きさとは関係があるのでしょうか。・クロマツ、エゾマツ、モミ、ツガの区別ができますか。・山火事によって何かいいことがあるのでしょうか」

以上のような質問は、身近なことであるのにもかかわらず知らずに過ごしていることが多いようです。本文には、その質問に次のような答えが示されています。

「いく種類かの常緑樹の毬果は山火事のときの激しい熱のあと開き、種をまき散らすことがある。まつかさの大きさは必ずしもその木の大きさと関係があるわけではない」

それでは、実際にこのようなことを子どもに教えるにはどうしたらよいのでしょう。我々は、子どもの生活にとって自然がいかに大切であるか十分承知しているつもりではありますが、その教育法論において必ずしもいつも正しいとはいえません。筆者の知るある植物学者は、子どもの自然教育において最も大切なことはまず身近な自然界に出ていって、実際のものをよく観、それぞれをくらべてみることであるといいます。図鑑やフィルムで代用するのは本末顛倒であるといいます。そして何故かの理由づけをしたり、人間の生活と直接関連づけたりするのは、ずっと後でよいといいます。なぜなら自然界は複雑なしくみになっており、ひとつの現象をみてすぐに結論を出すのは危険であるからです。我々は自然に対する知識を、教師の口や教科書によってのみ学んだこともあります。そして、時には実際の経験が少ないために、図鑑の方がたよれる存在となっている人もあるでしょう。グエン・ザイヒナーの小論は、筆者の意をも含めたことを必ずしも言いつくしてはおりませんが、くり返し、自然は子どもの教育においてその可能性に限りがなく、いく種類かの感覚をつかう総合経験になるといって、実際に自然物や生物と出会うことの大切さを力説しています。

次は、一九七四年十一月、十二月号に掲載されている"Learning What Children Know"(by Margaret Yonemura)と、"Growing Through Sensitive Listening and Questioning"(by Robert B. Sund)という二つの小論を参考に、子どもの話のきき方、ことばかけのし方について考えてみましょう。

最初の小論には、三歳になる子どもとの次のような会話が書かれています。

「ある教師が子どもが〝大きい〟と〝小さい〟という意味を理解しているかどうかを知るために、〝あなたは大きいキャンディーと小さいキャンディーと、どちらをもらいたいですか？ と彼らに尋ねました。

子ども1は〝小さい方〟子ども2は〝小さい方〟子ども3は〝大きい方〟と答えました。もしここで教師がやめてしまったら、彼女はまちがった結論を出してしまったかも知れません。しかし、彼女は子どもたちの発言のもとになっている考えを知るために、何故そう考えるかを尋ねてみました。

すると、子ども1からは〝なぜって大きいキャンディーを食べると虫歯になるでしょ〟子ども2からは〝なぜって大きいキャンディーは口の中に入らないでしょ〟子ども3からは〝なぜって大きい方が長持ちするでしょ〟という答えを得ました。彼女は、それぞれ三人の子どもが彼らなりの方法で、大きいと小さいという意味の違いを理解していると分かったということです。

そこで著者は、子どもの思考を深く知るためには、一対一を基本として子どもと会話をしなければならないといいます。そうすることで教師対グループの子どもたちでは発見できなかったことにぶつかります。記録にはテープレコーダーを使って録音しておくのもひとつの方法でしょう。

子どもに身近な事象について具体的に尋ねてみると、思わぬ子どもの思考の世界を知ることができます。ピアジェはこの方法をとって子どもの世界観を書いたわけですが、我々教師も、日常子どもたちとつっこんだ会話をすることによって、彼らが今どこにいるかをより詳しく知ることができ、それによって、実際にそれらをカリキュラムの中に生かすことができると述べています。

サンド（Sund）の小論は、質問のし方と上手なきき方についてであります。例として〝影〟についての質問がありますので、それをそのまま引用してみましょう。

「1〝影について知っていることをいって下さい〟（これは子どもたちからいろいろな反応を期待できるので、非常によい方法である。教師はまず、あることがらについて、子どもがどれだけ知っているかを知る必要がある）

2〝どうしたら影をつくることができますか〟（より具体的な質問のしかたではあるが、いくつかの答えを期待できるのでよいきき方である）

3〝自分の考えが正しいかどうか、どうしてわかりますか〟（教師は、子どもが証明するために実際の行動をしてみる方向に注意をむけている）

4〝影についてどんなことがわかりましたか〟（子どもたちはそれぞれ自分のやった結果を、他人のそれとくらべて共通点を見出すので、やや質問の内容をしぼった形である）

5〝この学校で、どうやったら巨大な影をつくることができますか〟（子どもに創造的な考えを要求するのでよい質問である）

6 〃大きな影をつくるのにはどうしなければならないか〃（やや焦点をしぼった質問で、子どもは影をつくるときしたことを考えてみる）

7 〃影はどうやったらできるか、一言でいってごらんなさい〃（子どもは自分の経験を総合判断して、言葉をつかって表現しなければならないので、一番最後にする質問としてよい）」

以上の例をとりあげてみたのは、質問のあり方について考えてみたいと思ったからです。我々はふつう子どもから、単に「はい」とか「いいえ」という答えを要求することが多いのではないでしょうか。それらはグループの子どもに一斉に質問するのに便利ですし、また答えを得るのにそれ程の時間を必要としません。しかし、著者は子どもに語りかける場合、十分に時間をとって答えを待つことは、もっと大切なことであるといいます。子どもに質問をし、子どもが彼らなりに十分考える時間を与えることと、その結果が単に教師とのフィードバックだけではなく、子ども間の会話へと広がることが、上手なきき方であるといいます。

インドのクリスナムルティ（Krisnamurti）という哲学者は、アメリカ人のもののきき方について次のようにいっているそうです。「アメリカ人は本当に聞いているのではない。彼らはいつも聴いたことを判断している」と。これは、たとえば教師の役割を例にとってみますと、教師は自分の役割を、課題を発展させることに見いだしているので、そういうことになるわけです。もし教師が自分の役割を、人間の発達過程を助けることだと自覚すれば、子ども（人間）にまず焦点をおき、内容はその次になるであろうと著者は説明しています。子どもが話している途中で、教師が訂正したり中断したりしますと、子どもは自分の考えを先に発展させることができなくなります。そこで、上手なきき方として著者がつけ加えていることは、子どもと会話をする場合は、まずその本人に関心を抱き、彼が話を終わるまで十分に聞くことであり、その間に顔の表情や身体でこちらからの反応を示すことも大切であるといいます。もし子どもがすべて言い終わったら、教師ひとりがそれに反応するのではなく、他の子どもたちも会話の仲間入りができるよう、誘ってみる必要があるといっています。

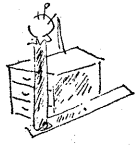
今回は、筆者の興味をひいた二つの観点から、好奇心の発見とその育て方について限られた論文をもとに考えてみました。『Childhood Education』の一九七四年十月号から一九七五年二月号までには、その他様々な角度から好奇心をとらえる小論が掲載されています。

（十文字女子短期大学　江波諄子）

保育の体験と思索

――子どもの世界の探究――（七）

津守　真



前回、三歳児の二学期に、いろいろな子どもに観察されたことのひとつとして、劇あそびのはじまりのことを述べた。それは筋書きのある劇をするということではなくて、子どもは自分が体験したことを、おはなしの中で再体験し、さらに劇あそびとして再現することによって、何度も自分で確認してゆく作業であることを強調した。

その後、たまたま、附属幼稚園のM先生、K先生と話していたとき、三歳の後半になると、いつのまにか、子どもが劇あそびをしているということに話が及んだ。劇あそびをしましょうというのではなくて、子どもたちは劇あそびをしている。そして、ひとつの話には、きっと子どもの喜ぶ個処が一、二か所あって、たとえば、だれかが川に落ちて、その人を助けるところにくると、みんなが活気づいて、とびこんで助けにゆくという。話の全体としての筋というよりも、子どもの体験にふれる部分があって、子どもはそれを確認しているようだという。そして、M先生は、以前に研究会で三歳児のこういう劇あそびのことを話したら、三歳児にシンデレラの劇をするのは高度に過ぎるという批評を受けたけれど、三歳児のシンデレラの劇あそびは、シンデレラの劇をしているのではないのね、と言われた。私は丁度家庭の三歳児の劇あそびのことを書いたばかりだったので、幼稚園の先生の、何回もくりかえされる三歳児の体験の中に同様のことがあるのを知って、私が書いたことが確かめられたように思った。

家庭の子どもAの、三歳児後半、年齢にすれば四歳の誕生日をすぎたころに顕著だったことについて述べてきたのであるが、そのころに顕著に見られたことがもうひとつある。それは、自分か

らよい子になろうとする傾向である。このことは、幼稚園の三歳児の二学期にも見られる。とくに二学期の後半になると、子どもたちがめちゃくちゃなことをしなくなる。おとなのいうことにすぐに従うことが多くなり、手を焼かせることが少なくなる。そのことのよしあしは、別に問うことにして、Aに見られたよい子になろうとする傾向について、次に考えたい。

いい子になること

Aが四歳の誕生日をすぎた秋から冬にかけて、Aは自分からいい子になろうとすることが顕著に見られるようになった。他の子どもに積み木を貸さなかったり、自分が遊んでいるものに他の子が手をつけたりすると、大声を出したり拒否したりすることが多かったころと比べると、一段の進歩のように思える。そのころには、貸すことができないときにいちいち言いきかせていたのでもなく、貸すようにさせてきたのでもなく、また、何もしないでいたのでもない。相手の子どももいるから、そこで一緒に困ったり、同じ物をさがしたり、両方が共にたのしめるように一緒に遊んだり、そして、あるときには理由を言って貸すようにしむけたりしてきた。そして、葛藤する間に入って困惑し、立往生することは、一日に何度もあるのが普通だった。そういうとき、私はいつも、そのときにはまだ相手のことが分からなくても、おとなが一緒に遊んでみんなが楽しめるようにしていれば、いちいち口を出さないでも、自分から相手のことが分かるようになり、道を見出してゆくようになることを信じていた。もちろん、だれもが私と同じように考えるのがよいなどとは思わない。だれも皆、性質も違うのだし、自分のやり方を見つけてゆくのがよいと思う。ひとつ明瞭なことは、一回ごとに言いきかせ、教えてゆかなければ教育ではないという風に考えると、教育ということをあまりにも形式的に、機械的に、直線的に近視眼でとらえすぎることになろうということである。

こうして、何がどこでどう作用したのかはわからないのだが、四歳の誕生日をこえたころから、この子どもは、他人の観点から理解し、自分をそれに合わせ、いい子になろうとすることが顕著に見られるようになってきた。

次に、その例をいくつか掲げる。

昼食のとき、Aはふと気がついて、向かい側に座っているOにいう。

A「どうしてOさん、左ぎっちょなの？」

そして、自分の箸を持っている手と比べる。

O「ぎっちょじゃないわよ、むこう向けば同じよ、ほら」

A「どうしてむこう向くの？　あたしはこっち向いてるのに」

とふしぎがる。　（11月20日）

これは、自分の左手は、相手から見ると右になるということを発見しかけたときの事例である。すなわち、自分の側からだけでなく、相手の側からの見方の認識のはじまりと言えよう。

A「お兄ちゃま、自分の妹には親切にしなければいけないのよ」という。

夜ねにゆくとき、Aはお兄ちゃまのところに「おやすみなさい」と言いにゆく。

「お兄ちゃま、おやすみなさい。あたち、お兄ちゃま、とっても好きなの」　（12月20日）

これも小さなあたりまえのようなできごとであるが、この子どもにとっては大きな変化である。兄は妹に親切にしなければいけないと言って、兄の側からの見方が認識されている。また、自分から兄のところに夜ねるときの挨拶にいったり、いつもけんかの絶えない兄のところに「好きなの」と言いにいったりするのは、意識して、自分がこうするのがよいと思う行動をとることであり、それまでに見られなかった行動である。すなわち、Aは自分からよい子になろうと努力している。

朝、兄がP（Aの妹）の誕生日だと言って、Pにノートと鉛筆をプレゼントした。Aはそれをじっと見ていたが何もいわない。兄が「それ、ここにいれたら」と、Aの「だいじなものいれ」にいれたら、A「そこ、あたちのだいじなものいれるところよ、だけど、共同にしようよ、きょうどう」と言う。AはPの誕生日だと張切っている。　（12月30日）

それ以前には、自分のだいじな箱に妹のものをいれるというようなことは、Aにはがまんができなかった。それを共同に使おうというように、自分の中に相手をいれる認識ができてきている。

Aが赤と黄のつみきで、うちを作っている。なかなか面白いものができた。Pがそばにいって使いたがるが、Aは使わせない。Pは泣き顔になる。私はPをさそって、白木のつみきで作るようにした。Pが一寸その場を離れたとき、Aがきて、Pの使っていた白木ののつみきを一杯にひろげて、うちを作りはじめた。Pはもどってきてそれを見て、「Aが使っちゃった」と泣き声になる。Aに一緒に使わせてあげなさいと言うと、Aは積み木を全部かか

えこんで、Pにさわらせない。「だって、あたし、両方を使いたいんだもの」という。

（1月25日）

いい子になることができてきたAも、このような場面になると、妹といっしょに使うことができない。いい子になるということには、ある限度があって、その限度をこえると通用しないようである。一度いい子になることができたら、いつもいい子でいられるのではなくて、いい子になれないこととの交替のくりかえしのようである。

A「天国って、空にちかいんだよね」

兄「人間に見える天国は、四次元なんだよ」

A「いい子って、手づかみでたべないことでしょ、デパートにいったときも」

母「Aちゃんが、赤ちゃんのおもりをしたり、Pちゃんに親切にしたりするときもよ」

A「あたし、きょう、赤ちゃんのおもりしてあげた」

（2月2日）

Aは食卓で手を使って食べることが多かったので、手を使わないでお箸でたべなさいとしばしば言われた。いい子になるということは、親や先生がその子に言ったり、要求したりすることと関係が深いようである。母親が、赤ちゃんのおもりや妹に親切にすることをいうと、すぐに自分が赤ちゃんのおもりをしたことを述べ、母親が言ったことに、自分の行動をあてはめる。つまり、意識の面でおとなの要求に合わせようと努力する。具体的なおとなと、具体的な行動が問題になっているが、これは次第に、より内在化されてゆくであろう。この会話には、先行する会話がある。そこでAは、「イエスさまって、神さまのお兄さんなの、それでお母さんが神さまなんでしょ」と言っている。神さまという目に見えない存在に関連する行為の規準と、母親とが混同されているが、内在化への方向を見ることができる。

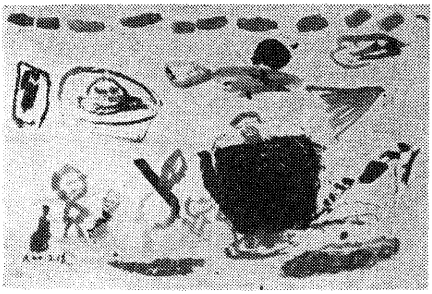
ここに掲げた事例は、いずれも、満四歳の誕生日の後数か月の間のものであり、幼稚園の区分でいえば、三歳児後半に属する。これらは、おとなからみていい子になったと思われる例であり、また同時に、子ども自身もいい子になろうとしている例である。おとなの期待や要求に従うとき、おとなはそれをいい子だと思う傾向があるようである。そしてそのことを疑ってみようともしない。

丁度、同じ時期に、Aの描いた画をここに掲げて、そのころ

に、Aの世界に起こっていたであろうことを考えてみたい。（写真参照）

この絵は、家庭で描かれた水彩画である。これをかいたとき、最初にえのぐを使っていた兄が九枚もの絵をかき終わるまで、Aは長い時間待っていなければならなかった。いつもだと、えのぐを使う順番がくるまで待っていることができず、小さい子どもが何人も一時にえのぐを使うので、大騒動になるのだが、この日はAは静かに待っていたので、ずっと手がかからなかった。

絵は主として赤と青で描かれている。中央の赤い大きなかたまりは、「せんしゃ」という。左の方に描かれている人の右側の方



は「おかあちゃま」である。「せんそうしてるの」という。中央上方に、横むきに青色で人が描かれ、「天使、せんそうでけがをしたの」という。赤いえのぐで、点々と滴をたらす。右上方に右向きに描かれているのは、一つはワシであり、一つはツバメである。そして一番上方に、紙のへりにそって、天の線（あるいは雲）が描かれる。（紙の大きさ90センチ×60センチ）

これを描いたときには、私はえのぐを使えるように周囲をととのえたりなどするのに追われて、何を描いたのか見る暇もなかったが、後になって、この頃のAの様子を見直しながら見ると、意味深い絵であるように思う。

「せんそうしてるの」という言葉からもわかるように、画面全体が戦場である。描画を心の内面の表現と見るならば、これは内心の戦いをあらわしているといえるだろう。いい子になろうとするのには、子どもは内心の葛藤を戦わねばならない。自分の本来の野性と、おとなの要求に合わせようとする欲望との間の戦い、あるいは、地面から飛び上がろうとするときの重力との戦いである。飛び上がった天使は「せんそうでけがをして」傷つき、赤色の血を点々と滴らせる。天使と一しょにワシとツバメも、右の方に何かを目指してとんでいる。いい子になるのには、子どもは内心の戦いをたたかい、傷つき血を流していることもあることを、

この画を見直すまで私はあまり考えたことがなかった。おとなは、子どもがいい子になったことを、成長したと言ってよろこぶ。しかし、そうなるために、子ども自身がどんなに幼い努力をしているか、何かを犠牲にしている場合もあるということを見ようとしない。それはおとなの目からは努力とは見えなくとも、子どもは大へんなエネルギーを使っているのだと思う。

だから、子どもがいい子になっていられるのには限度がある。その限度をこえるときには、もはやいい子になっていられず、妹につみきをかすこともできず、自分で独り占めにしてがんばる。そういうとき、おとなはこわい顔をして子どもをにらみつける。ひとたびいい子になることができた子どもは、いつもいい子にしているのがあたりまえと思っているかのようである。いい子にしていられる限度が破れると、おさえられていたものが爆発して、いい子とは逆の傾向が噴き出してくる。これがおとなにも子どもにも共通の人間の全体像ではないだろうか。

この画をかいてから十年後に、この同じ子どもがふともらした言葉。「あたしの心の中には、二人の自分があって、ひとりがこうしなさいというと、ひとりがこうしないっていうの」こういう言葉に出会うと、またあらためて、四歳のときにも同じことがあったのだと思う。

子どもも、おとなも、いい子の顔をしていられるのには限度があるのだと思う。いい子にしていればいるほど次の瞬間には、いい子とは無関係な素顔の自分になっていなければいられないであろう。子どもはその両方をうまく使っている。幼稚園でいい子になっている子どもは、家に帰ると、その逆の行動を示すことをしばしば見る。また、幼稚園で粗暴でいうことをきかない子どもが、家ではいい子になっていることも少なくない。おとなは、その人によって、子どものどちらかの側面を引き受けることになる場合が多い。教師は、どちらかというと、子どものいい子の面に接することが多く、その逆の面も、どの子にもある当たりまえのことであることを忘れがちである。親は、学校や幼稚園でいい子の生活をしてきたあとの反動の面を引き受けることが多いので、どんな子どもにも、いい子になろうとする側面があることを認識して信頼することがむつかしい。

子どもに、この両面があることを認識することは重要なことだと思う。子どもがいい子にばかりなっていたら、本来の自分らしさを発揮して生きることができないであろう。もちろん、外に顔を向けて、いい子になることも必要であるが、内に顔を向けて、自分の本領を出して生きることは、同じ程度に、あるいはそれ以

上に必要であろう。

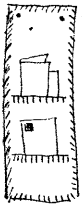
幼稚園で、三歳児の後半になると、おとなの期待に従って行動することが多くなり、全体が整然としてくることが目立つ。これは、子どもたちの成長の結果として喜ぶべき面もあるが、いい子にはなれない子どもたちの素顔の面が、同時にあって当たりまえだという認識がたいせつだと思う。人間のその両面が出て、生活の場となる。

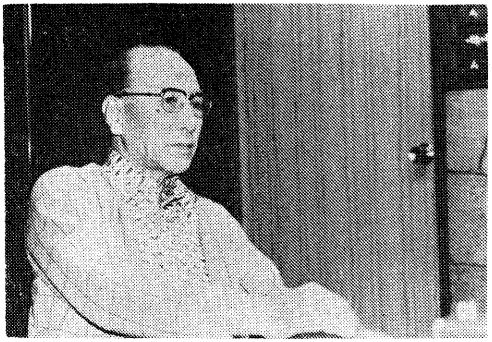
もしも、幼稚園が、いい子の面だけしか出せないところになったら、整然としたいい子の姿だけしか見られないところになっていたら、幼児の生活の場としては、どこかに無理があると考えてよいであろう。子どもは、おとなから見ていい子になっているときもあるし、また、おとなの期待にそわない、理解の困難なことをするときもある。その両方の姿があって、成長がある。

人が社会の期待や要求にこたえようとする傾向が強くなりすぎると、忙しい現代においては、自分自身のありどころを見失う恐れがある。学校や塾のいろいろの先生の要求に沿うことを期待される子ども時代からひきつづいて、休む間もなく社会に押し出されて、人は自分自身を発見する暇がない。そこで、期待に沿って生きるか、あるいは反逆するかのいずれかになってしまう。反逆も、期待に沿うことの一面に他ならない。期待の度が強くなるほど、それは破壊的に作用し、自分自身をも破壊することもある。破壊的に作用しはじめたと見えたら、おとなは期待を放棄しなければ、回復に向かわないであろう。おとなにとっては、期待を放棄するということは、実にむつかしい作業である。期待や要求に沿うことを放棄するところから、人は自分の道を見出し、自分自身に対して生産的になりはじめる。

子どもにとっては、手を使ったり、体を動かす作業は、自分自身で楽しみつつ、次の活動を生み出す作業であり、本来、他人からの要求や期待とは縁のうすい性質のものである。それぞれの子どもの持ち分や、歩み方に応じて、自分でたのしめる生活を作ってゆくことが、周囲にふりまわされないで、着実に自分自身を見出してゆく道であろう。

（つづく）





渡辺　茂

★対談★

子どもの中からうたを

きき手　村田修子

渡辺茂先生は公立及び国立の小学校の教諭、校長を経て、現在東京学芸大学講師（付属小金井小学校）、私立弥生幼稚園（東京・世田谷）の園長でいらっしゃいます。数多くのうたの中で「たき火」「ふしぎなポケット」などの作曲は、皆様よくご存知のことと思います。

最近は、特に幼児のための作詩作曲をなさっておいでになる先生を、お茶の水女子大学附属幼稚園の村田修子先生に訪ねていただきました。

お二人は作曲と作詩で何度かコンビを組んでいらっしゃる間柄であり、またゴルフ仲間でもあるとか、録音の準備をする間もなく、さっそくお話は始まってしまいました。

対談の最後に、村田先生が子どもの中から見つけられた言葉をお出しになると、フンフンフン……と十分程考えていらした渡辺先生は、後載のような素晴らしい歌に仕上げてくださいました。

子どもの中からうたを

村田　先生はどんどんすてきな歌をお作りになるんですね。

渡辺　それは簡単にチョロチョロと出るものじゃなく、どういうものを作ろうかという、とっかかりに苦労しますね。っていうのは、今まで随分いろんなものを作っちゃったでしょう。単に叙情的なものとか叙景的なもの……歌唱曲としての曲は、もうあきあきしちゃっているのね、私は。最近は、作業歌でもいい、何か自分で歌いながら何かをやって育っていく、親も子も、大人も何か一緒にやりながら覚えていく、自然に理解していく、そういうような歌を作りたいって、だんだん目標がつまってきたんです。

春の空に白い綿雲が浮かんできれいだな、雲雀が鳴いて……というような歌よりも、もっともっと、具体的なものを作りたいですね。

村田　やっぱりそれは、子どもをよけいに知ったからで

しょうか。

渡辺　そうかもしれませんね。叙情的、叙景的な歌は、もう沢山あるし、そういうのは他の作曲家にまかせておけばいいっていう気持ちなんです、今は。子どもとこうして長い間生活してくるとね、子どもと直接に結びついた歌、歌っていてそれで何かが育つとか、技術を覚えたり、知識を積み重ねていったり、といったようなものが、作りたくなってきますね。

村田　そうですね。私も子どもといて、本当に必要な歌がほしいし、作りたいなあと思いますね。

渡辺　要するに現場で直ちに必要とする「直接の歌」ね、ウーン。先生たちは本当に直接子どもとのつながりがあるけど、僕なんかは、子どもと生活しているとはいっても、担任がいたりで、ワンクッションあるわけよ。そうすると本当の子どもの姿をつかむチャンスは割合少ないんですよ。担任だったらいやおうなしに保育時間中はピッタリですからね、子どもとは。ところが私はそうじゃない。ちょっと距離があるわけですから……。

村田　子どもって文章として歌になったことをいうわけではないんですが、我々がこうだと既成概念で思っていることを、全然そうじゃない言葉で言ってくれることがあるんですね。例えば、本で「とびうお」の話を読んでいたら、「あ、それじゃあ水の上を飛べるんなら、とびうおはトンボサカナなのね」って言ってくれるんです。それを、「ア、ナルホド」と思って書きとめておくんです。子どもは一度しか言ってくれませんから、そこでつかまえなくてはだめなんです。

渡辺　いいなあ。そういうチャンスが多いから、担任は。だから僕は一度担任やってみたいなとよく思うんですよ。

村田　保父さんっていうのが、このごろあるんですよ、ぜひなさったら（笑い）。

渡辺　いまさら体力的に続かないしね。

そういう点では、あなた方は素晴らしいチャンスをつかむ可能性が多い。こっちはある程度、想像になっちゃうわけ、クッションがあるからね。

トンボサカナなんて言葉は、まことに面白いね。ただその言葉だけでも面白いと思うけど、その前後の子どもの状態を考えてみたら、さらにこれを生かした言葉をくっつけて、すぐ詩ができる。村田先生ならそれができる

わけです。僕は話をきいて面白いなあと思うけど、そのあとは想像ですから、実感は割合少ないんですよね。

村田　じゃあ、私はとても幸せな立場にいるんですね（笑い）。

渡辺　本当にそうなんですよ。そういう目で担任をみていたら、担任は本当に幸せだと私は思いますね。

　こんな歌があったら面白いかな、こんなのは役に立つかなって、空で考えていくようなことは随分やってきたわけね。例えば、アイウエオのことで何かやってみたり、右左のこと、東西南北のこと、暑いとか寒いとか、あまい、にがい、すっぱいなんていう味のこととか、大きい小さいとか、ふくらむちぢむとか。子どもの日常生活の中でのいろいろな場面をとらえて、そこから何か作りだしていこうと思うんだけどね。最近はもう種切れ。年のせいかな（笑い）。子どもの中にはあるんだろうけど、つかむきっかけが非常に少なくなっちゃった。

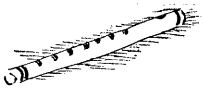
　そういう点でね、今みたいな、トンボサカナっていうような話をきくことが、私の喜びになるんです。

村田　本当にハッとすることがありますね。それがね、忙しいでしょ。その時に書いておかないと、何かあったなあとあとでいくら思い出そうとしても、自分で考えたことじゃないから思い出せないんですよね。おしいなあと思います。その子どもにきいてみても、全然だめでしょ（笑い）。

渡辺　それだめね、ウンウン、たしかにそうだね。その時の直感でパッというだけだからね。

村田　だからなるべくポケットのある洋服を……先生の「ふしぎなポケット」じゃないけど……いつも着てね、小さな紙とエンピツを入れてるんですよ。

渡辺　それはいいね。音楽の面からだけじゃなくて、あらゆる面からパッとひらめいたこと、気のついたことをね。それは、どの先生にもぜひやってもらいたいものだ。



子どもの中へうたを

渡辺　そんなことで歌を作ってたのしみにしているんだけどね。実際にそれを子どもの場にぶつけてみるチャンスは、幼稚園にいるんだからありそうなものなんだけど、意外にないんですね。担任にどいてもらって、さあやろうってわけにはなかなかいかないでしょ。やっぱり保育の中でその歌が出て来る必然性があって、またその歌の流れが続いていくっていうふうであってほしいわけでしょ。例えば「みぎみぎひだり」の歌だって、右はこっち、左はこっちというんじゃなくて、そこに来るまでの流れがある。そしてその歌があって、その歌を覚えることによってそれからまたあとの生活がね、右左を覚えた生活が少しずつ出て来る。そう考えるとね、担任を通してやってもらうよりしょうがないということになるわけ。いささか、靴の上からかいているみたいで、なんとも……。

私は今学芸大学の付属小金井小学校で、音楽の授業を持っているんです、一年生の。その時にある程度使ってはみるんですがね、小学校は教科書もあるし、もちろん私の曲ばかりやるわけにはいかないしね。ま、そういう意味では、さっき言ったように、担任になりたいなあと思いますよね。保父さんでしたっけ（笑い）。ただ体力は続かないな（笑い）。できれば一時間位時間をもらってやっても面白いかもしれないな。

村田　私のクラスに来てやっていただきたいわね（笑い）。

自分がいろいろな歌を知っていれば、その歌をやる方向に持っていくこともできますね。例えば、乗物の話とか交通安全の話になったときに、「みぎみぎひだり」の歌に持っていけるわけですよね。

渡辺　そうなんだ。こっちにはそれができないから、いらだたしさがあるわけ。頭の中の引出しには自分の作ったものがいろいろつめ込んであるからね。いつでも取り

出せる用意はしてあるんだけど、取り出すきっかけがないんだよね。

村田　私たちなんか、引出しあけたら空っぽだっていう時が多くて（笑い）。何かここであればいいなあって思うんですけど。おしいですね。

あのうたのことこのうたのこと

渡辺　「はいこんにちは」を作った時のことですけどね、園長室からボカーッと子どもを見ていたら、子どもたちが鉄棒をやっていたんです。クルッとまわれた喜びを表現しながら、子ども同士で遊んでいるのをみてると、クルクルまわって、ひょっと顔が出て来てこんにちは……ってね。ア、そうか、これを歌にしてみようかってね、ひょっとしたきっかけでできるんですね。ちょっときっかけがあると、それからそれへ発展していって、面白くなってくるんですよ。

村田　きょう、その歌、私の組で歌ったんです。すべり台でぶつかって、ちょっと傷したんですね。大したことはなかったんで、一応冷やしてから、皆が集まった時にね、〝おすべりスルスルすべってハイこんにちは〟って、こういうすべり方すればよかったのにねって話して、みんなでこの歌を歌ったんですよ。

渡辺　ウーンなるほどね。

村田　前に先生に作っていただいた「のはらでごごろ」っていうの、あれなんかも、遠足に行ったらたいていいつも歌えるんですよ。

渡辺　あ、あれはいいね。

渡辺　子どもが会話の中で〝ウン〟という言葉をよく使う。気になってしょうがないからね、「〝ウン〟という子はくさいんだ」って言うとね、始めはキョトンとしていて、そのうちにわかってきてね、ワーッと笑い出すんだ。そこで「ウンという子はくさい」をメロディーにしたんです。お友だちや仲間に言う時は〝ウンそうだよ〟

って言ってもいいけど、先生や親には〝ウン〟なんていうお返事はだめなお返事だ。だから「ウンという子はくさい、ハイっていう子はいいかんじ」……なんてね。

村田　なるほど……（笑い）。

うちの組でね、「みぎみぎひだり」を歌っていたんですよ。そしたらあのあとのね、ウンパ、ウンパ、っていう所ね、そこが面白くて、調子に乗って、アンパン、アンパン……って（笑い）。

渡辺　そういうのはいいね。アンパンがでたとはおもしろい。ウンパウンパじゃなくていいんだもの。要するに、あと打ちの感じがつかめることが大切なんでね。ウンパなんて言葉自体はどうでも良いんだからね。僕も大部やったけど、アンパンは出て来なかったなあ（笑い）。

村田　このごろの子どもは、いろんな音を聴きなれているから、不協和音だとか、そういう面白い響きのする音が好きですね。先生の「でもなかないよ」で、ふざけっこしていたらチャンチャンっていう音ありますでしょ、ドミファラの和音でしたか、あの音なんか大好きですね。押し間違えちゃって、きれいな音で弾くと、なんとなく物足りなそうな顔するの（笑い）。

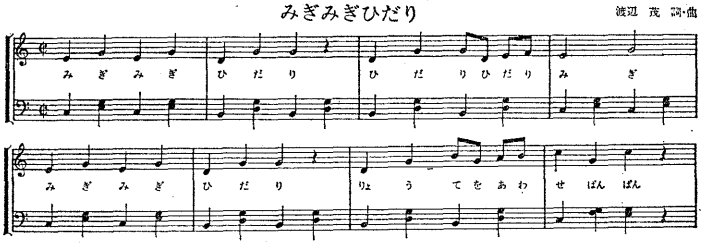
それに、本当にふざけっこしていてぶつかって泣きそうなった子に歌ってあげたりすると、泣くのなんかはずかしくなっちゃって、ニヤッと笑ってね。

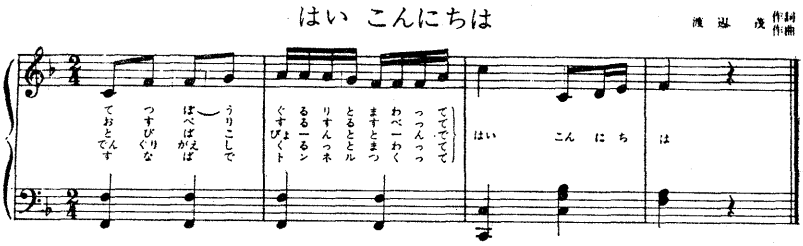
先生のお作りになった歌っていうのは、その場面場面で使えるんです。そういう、本当に生活の中ですぐ、先生が覚えていて歌ってあげられるような歌をもっと沢山知っていたらいいな、自分でもできたらいいなと思うんですけど。

渡辺　村田先生なんかは音楽的な理解もおありだし、作るチャンスも我々よりずっと多いんだから、できるはずですよ。おおいに作ってもらいたいと思いますね。

村田　どうぞ、また助けてくださいませ（笑い）。

渡辺　「あっちこっちどっちそっち」なんて歌も作ったんですよ。あっち、こっち、どっち、そっち、それだけの歌なんですよね。こうした代名詞を日常生活の中にながしていきたい、そういうねらいで作ったんです。リズミカルに身体を動かしながら遊んだら面白いと思う。だから従来のポエジーを持った詩を書く人がみたら、これは単なる言葉を並べたにすぎないので、詩ではないというだろうけど、ポエジーがあろうがなかろうが、それと





は関係なく、楽しい歌を作りたいね。

村田 「そっち」の前の一拍休みのリズムが面白いですよね。先生はあっちとかそっちとかいうのをお教えになりたいという意図もちょっとはおありになるように思われるんですけど。

渡辺 うん、まあそれだけじゃあないけどね。

村田 私なんかだったら、リズムと語呂がとてもいいでしょ、そっちの方を主に取りたいような感じがします。歌っているうちに自然に先生のねらいがわかってくる……。

渡辺 新しい角度から切り込んでいって、いい歌、面白い歌を沢山作りたいなあと思うんですけどね。

作詞の戸塚一郎、高すすむ、野中十三夫はすべて渡辺茂先生のペンネームです。なお楽譜の中で東とありますのは高の誤りですので、お詫びして訂正いたします。（編集部）

（JASRAC承認第520109号）

のはらでごろごろ

むらた みちこ 作詞
渡 辺 茂 作曲

♩= 84 ぐらい

1. みどりの はっぱ ちくちく するけれど 1,2.ころころ ころがる いいきも ちワーイ
2. ちゃいろの はっぱ がさがさ するけれど

ウン という子

戸塚一郎 作詞
渡辺 茂 作曲

ウン という子は くさい ハイッ ていう子は いいかんじ

でもなかないよ

東 すすむ 作詞
渡 辺 茂 作曲

ふざけっこしていたら じゃつんどぶつかって おひさまにぶつかっ
すりむいた でもなかないよいたいけど

あっち こっち どっち そっち

野中 十三夫 詞
渡辺 茂 曲

あっちこっちどっち そっち あっちこっちどっち そっち
あれこれどれ それ あれこれどれ それ

あっちこっちどっちそっち あっちこっちどっちそっち あっちこっちどっち そっち
あれこれどれそれ あれこれどれそれ あれこれどれ それ

自然な曲のながれを

村田　私は楽器が得意じゃないんですけど、先生のはちゃんと手がいきやすい所へいくように、伴奏がついているんです。あれ、不思議ですね（笑い）。

渡辺　私、自分があまり弾けないから、自分が弾けるようにしか書かない（笑い）。ソナチネ位でやる手のくせがついているんだ、私は。それに作ったものはやっぱり使ってもらいたいでしょ。だから作る時の態度としては、楽譜はできるだけ簡単に、っていうのね。あとの演奏の仕方は先生たちが考えて自由に表現したらいい。僕の気持ちとしてはね、楽譜はなるべく単純にして、目からの抵抗をなくそうと思ってね。二段楽譜で、いろいろとうっとうしい記号などほとんど書かない。それでいて使い方でいくらでも使えるんだってことです。

結局教師が「弾くこと」に懸命になっちゃってはどうしようもないからね。弾きながら他にすることが沢山あるんだもの。その方に心が向けられるようにするには、最小限の左手のなめらかさ、シンプルさを考えなければ。だから、僕の曲の調子なんかはCかFかG位しかない。たまたまシャープ二つとかフラット三つ位のがちょっと出て来るけど。私の場合だったら、その楽譜に書いてあるのは、その調子で歌わなきゃならないなんてあまりやかましく考えないんですよ。どうでもいいんです。「たき火」はCになっているんですけど、最初Dで作ったんです。Dで歌った方がずっと軽やかで明るい感じがして気持ちがいいんです。声の出る人だったらEsで歌ってもいい。Cで書いてあるのは、楽譜が読みやすいからです。半音あげてシャープ七つもついていたら、たいていの人が、見ただけでアーイヤダ、ダメダこんなもの、って……ポイでしょ（笑い）。

村田　〝ねこふんじゃった〟っていうアレ、譜を見るとウェーッてなりますね（笑い）。

渡辺　私自身そうだもの。楽譜を見て、シャープやフラ

ットがいっぱいあったり、休符やスラーやスタッカートや、記号がべったり出て来ると、ダメダメなんて敬遠しちゃう。

村田　私にとっては弾きやすいものを作ってくださる有難い先生ですわ（笑い）。

渡辺　バカにしたって思う先生もいるかもしれないけどね（笑い）。くり返すけれど、教師には弾きながらやることがたくさんあるんだものね。さっき自然に手が動くっておっしゃったけど、一般的に弾く動きっていうのは、大体きまっていると思うんですよね。だからそういう表現をすれば弾きやすいし、弾きやすいってことになれば使いやすいことになる。そうすりゃあ子どもの歌う度合いも多くなるしね。いろんな意味で目的を達する一つの方法です。

他の音楽家がみて、「なんだあいつは、これしか能力がないのか」なんて思われたって、一向にさしつかえない。最近こんな悟りみたいなものが出て来たのね。そういう年齢になって来たかな。だからバイエルに出て来るような簡単な伴奏でどんどん発表しちゃうんです。私自身はそれに対して抵抗なくできる。年齢からくる図々しさもありますね。気楽に二段楽譜でチョコチョコとやれるようになってきてね。その点私は、いわゆる世の先生方のためになっているんだっていう自負もあるんですよアハ、、、、。

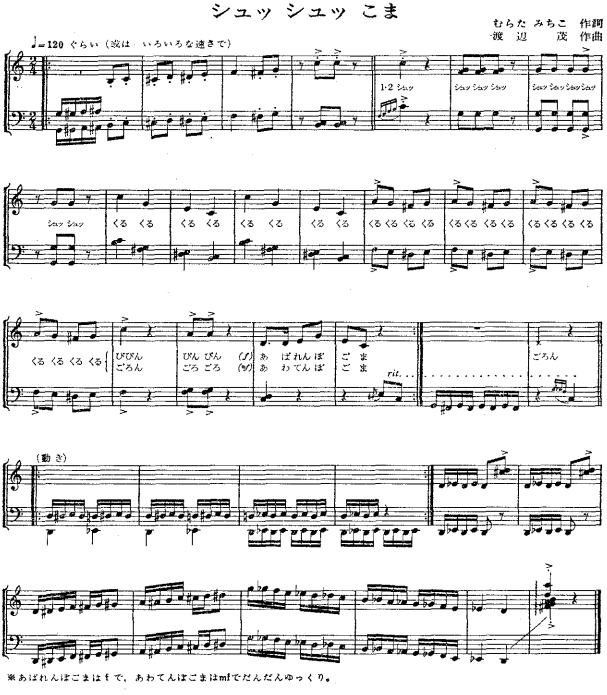
子どもの中からみつけた言葉で

村田　これ、子どもにもらった言葉なんです。（紙片をさしだされる）コマをまわしていました時にね、ゴロンと早くたおれてしまったコマを見て、「あ、あわてんぼゴマだ」と子どもがいうんです。ピンピンとはねているコマを見て、「あれは、あばれんぼゴマだね」って。アワテンボゴマ、アバレンボゴマっていう言葉が面白くてね。言葉としてはそれだけなんですけど、アワテンボゴマがまわるクルクルっていう音と、たおれるゴロンとい

う音、アバレンボゴマはシュッシュッとまわってピンピンととぶ。こんなんで何か歌ができますかしらね。

渡辺　フンフン……フンフン。なんとかやってみましょう。これもハ長調でね（笑い）。

（了）



※あばれんぼごまはfで、あわてんぼごまはmfでだんだんゆっくり。

幼児の教育　第七十六巻第六号

六月号　© 定価二〇〇円

昭和五十二年五月二十五日　印刷

昭和五十二年六月一日　発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津守　真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九—一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら，おとりかえいたします。

水しぶきみたいな子どもたち

この夏も、フレーベル館のプール、
水あそび用品をお備え下さい。

FRP大型プール

3.5×4.7m
高さ70cm

▲KP－50型
循環ポンプ付
847,000円

3.5×3.2m
高さ70cm

▲KP－35型
循環ポンプ付
627,000円

▼キンダープール(A)
95,000円

直径2.8m
高さ45cm

▲KP－15型
循環ポンプなし
235,500円
3.03×2.15m
高さ55cm

▼大型プール
130,000円
直径3.8m・高さ45cm

シャワーセット
84,700円
1.3×1.3m
高160cm

▲グランドシート
38,000円

▼キンダーカラーすのこ
1枚 8,500円
赤・黄・緑・青

◀大型プール用
濾過装置
450,000円

▲プール用滑り台
38,000円

▶魚つりセット
2,900円
魚15尾、竿5本

キンダー
科学教材シリーズ
みずでっぽう
250円

<わしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・本社営業課　TEL 東京(03)292－7781(代)にお問い合わせください。

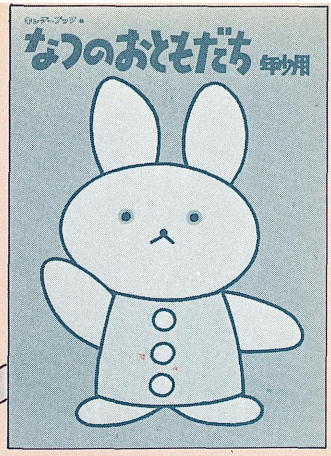
フレーベル館

おーい、夏！

キンダーブック の

なつのおともだち

※子どもたちが夏休みを元気いっぱいで過ごすために。



▲年少用

▲年中用

▲年長用

★今年も内容を充実させて、楽しくわかりやすくしました。

※年少用

ウサギのみこちゃんを主人公に、子どもの夏の一日の生活を、絵本風にまとめました。　　A４判　180円

◉付録「なつのせいかつ」（生活表）
　B４判二つ折

栽培用「きぬいとそうのたね」

※①年中用

くまの子を主人公に、たくさんのかわいい動物たちの生活をとおし、子どもたちが、楽しみながら、いろいろなことを考え、学びとり、充実した遊びができるよう配慮してあります。　　A４判　180円

※②年長用

子どもたちが、園生活で身につけた習慣を大切にし、創造力を働かせるよう配慮してあります。　　A４判　180円

◉付録（①年中用、②年長用共）
「なつのせいかつ」（生活表）B５判16頁
１週間ごとに約束事項を変えたり、簡単な日記にもなるよう１頁１週間にしてあります。また旅行の際にも持ち運び易いよう冊子にまとめ、楽しい工作頁もついています。

栽培用「きぬいとそうのたね」

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課　TEL　東京(03)292－7781(代)にお問い合わせください。

創業70年・キンダーブック創刊50年　フレーベル館